

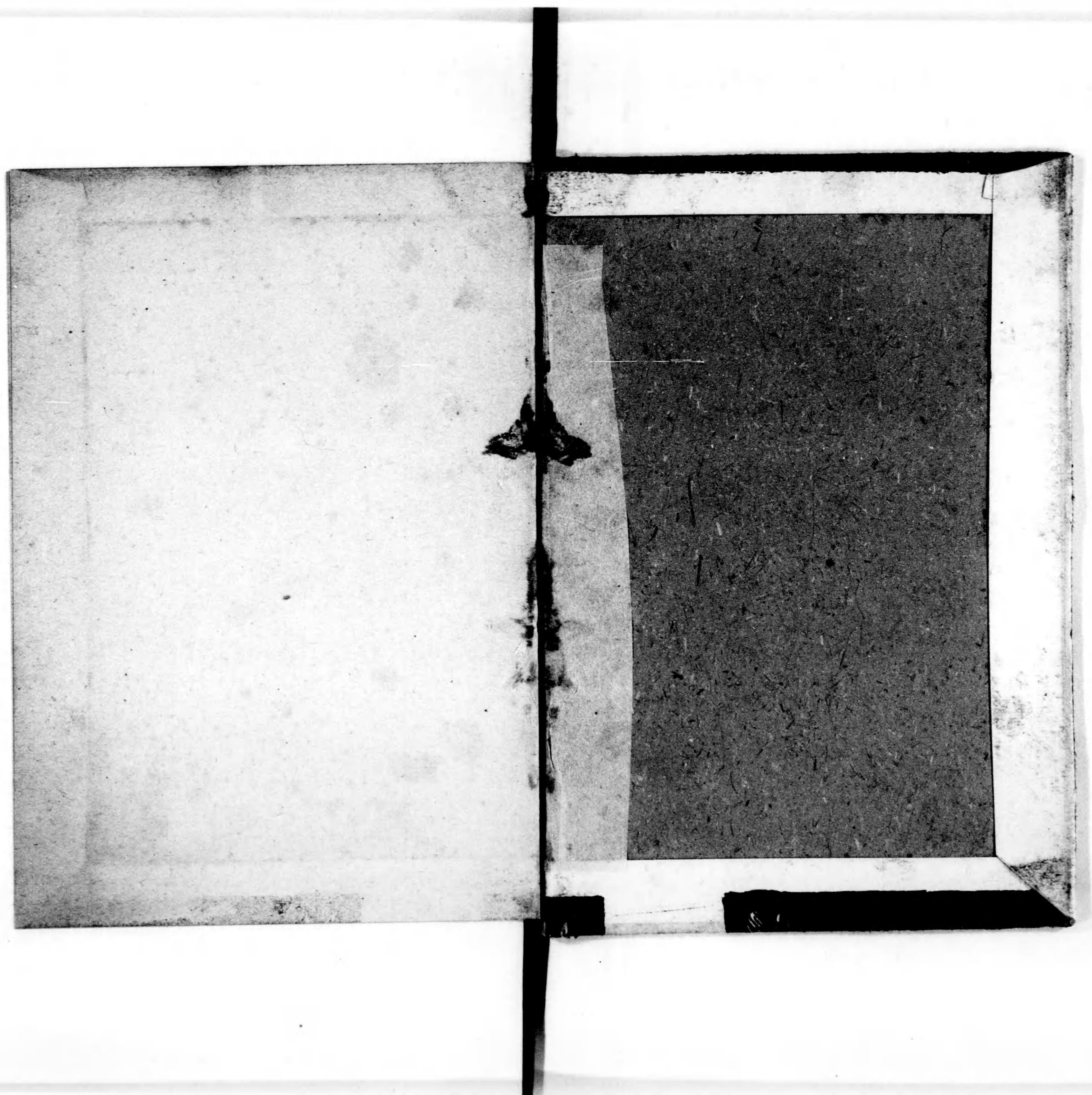


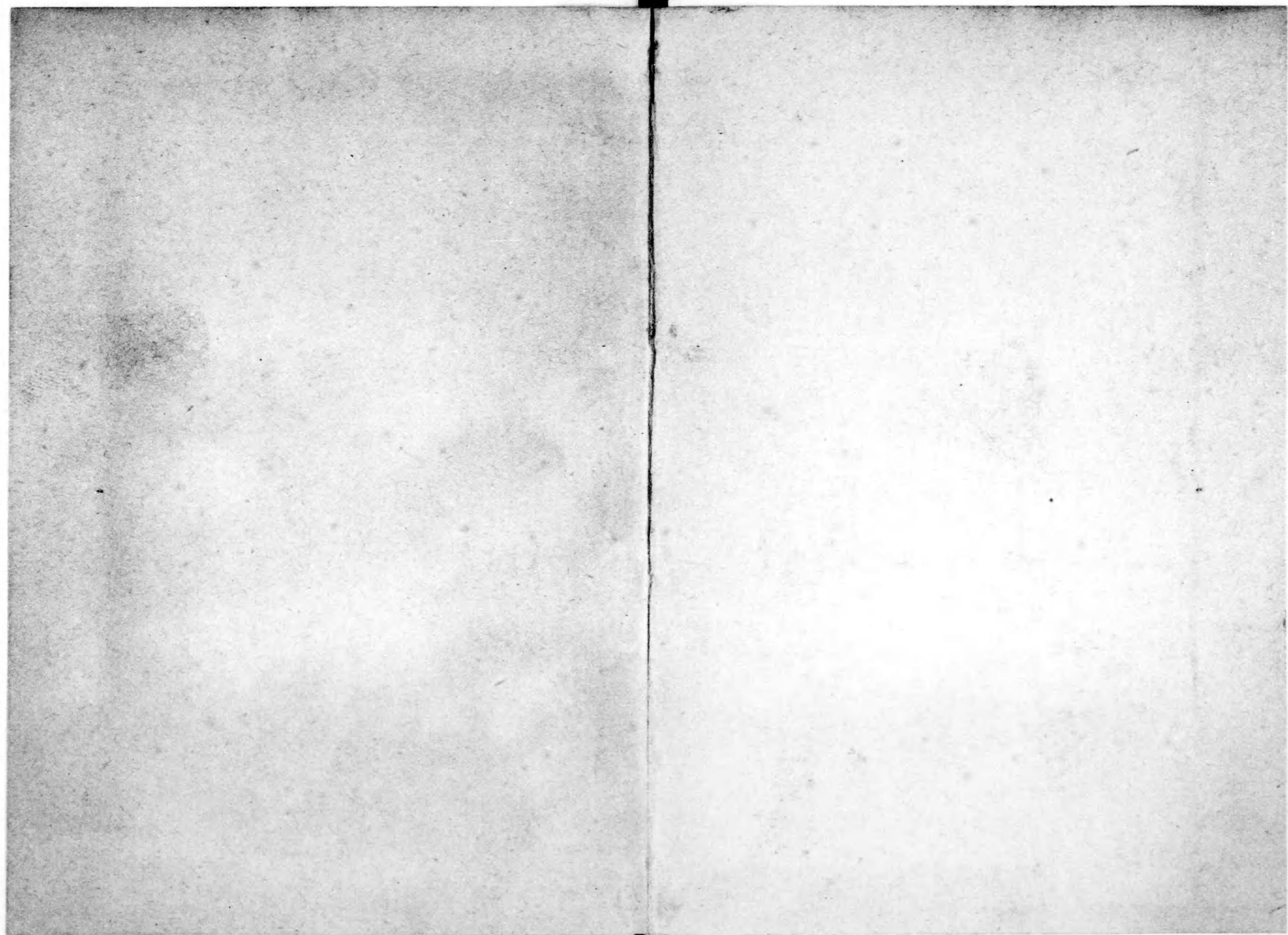
埃爵の夫人の犯罪



始







特100

56

書叢スンマロ罪犯

— 篇 — 第 —

作マーユヂ・ルドンサキレア
譯 換 永 福

侯爵夫人の犯罪

大正
10 8.10
内交
版藏社

侯爵夫人の犯罪



目次

- 一、騎士の捕縛……………一
- 二、騎士と侯爵夫人……………六
- 三、殺人鬼エキヂリ……………一五
- 四、父の毒殺……………二三
- 五、従僕ラシヨーゼ……………三二
- 六、兄の死體の解剖……………四一

七、騎士の變死……………四九

八、奇怪な函……………五九

九、ラシヨーゼの告白……………六七

一〇、侯爵夫人の逮捕……………七六

一一、函の中の恐ろしい懺悔……………八二

一二、證言の數々……………九四

一三、メートルヨンヅルの辯護……………一〇一

一四、ピロー博士の監房訪問……………一〇三

一五、侯爵夫人の改悛……………一二一

一六、懺悔聽問……………一三六

一七、懺悔……………一四九

一八、靈魂と地獄……………一六一

一九、水攻めの拷問……………一七〇

二〇、拷問の無効……………一八〇

二一、死に面する心……………一九一

二二、形見の珠數……………一九六

二三、公然の謝罪……………二〇一

二四、斷頭臺上の夫人……………二二三

目次終り

一 騎士の捕縛

西歴一千六百六十五年の秋、よく晴れた或る日の夕方に、巴里のヌーフ橋の上に大勢人だかりがしてゐた。群集の興味を牽附けてゐるのは、窓を閉ぢた一臺の馬車であつた。一人の警部が無理に馬車の扉を開けやうとしてゐる、警部と一緒に來た四人の巡查の中、二人は馬を引留め、二人は御者を押へてゐるが御者は巡查の命令には構はず、ひたすら馬を促し進めやうとしてゐる。悶着が暫らく續いてゐると、不意に馬車の扉が荒々し

く押開かれて、騎兵大尉の軍眼を着た若い士官が馬車から飛び降り、大急ぎで元のやうに扉を閉ざした。その行動は如何にも敏速であつたが、馬車に近く立つてゐる見物人の眠には、馬車の中に一人の婦人が坐つてゐるのがちらりと映つた。彼女は外套とヴェールで蔽はれてゐた、人々に顔を見られまいとするこの用意から察するに彼女は何か人目を避ける理由を持つてゐるに違ひない。

「君」と若い士官は傲然たる態度で警部に向つて云つた、「無論人違ひだらうが、兎に角君は僕に用がある事と思ふ、で、僕から訊ねるが、君はどういふ権利で、僕の馬車を引留めるんだね。」

それから僕が降つたんだから、君は部下にこの馬車を釋放する命令と與へてくれたへ。」

「何よりも先づ」と警部は士官の堂々たる態度に避易せず、馬車も馬も弛めてはならないと部下に合圖をしながら答へた、「私の質問に答へて下さい。」

「宜しい」と士官は云つたが、心の動搖を強いて制しようとする様子が人目にも知れた。

「あなたは騎士サント・クロア氏ですか？」

「さうです。」

「トラシー聯隊の大尉ですね？」

「左様。」

四

「では、私は國王陛下の名に於てあなたを捕縛します。」

「どうして君がそんな権利を持つてゐるのだ。」

「この勅書を。」

サント・クロアは素早く一枚の書附に一瞥を與へ、そこに司法大臣の署名があるのを認めた。しかし彼はやはり馬車の中にある婦人に氣を牽かれてゐるらしく、やがて又初めの問題に後戻りした。

「これはこれで宜しいが、」と彼は警部に云つた、「この勅書には僕の名より他には書いてない、だから、僕と一緒に來た婦人をこ

んな風に人の見世物にする権利は君にはあるまいどうか君の部下に馬車を釋放するやうに命じてくれたまへその上で君の好きな所へ僕を連れて行きたまへ。僕は何處へでも一緒に行くよ。」この要求は警部にも正當だと思はれた。で、彼は御者と馬を釋放するやう部下に合圖した。待ちに待つてゐた御者と馬は直ちに群集を押し分けて突進した。かくして士官と重大な關係があるらしく見えるかの婦人はうまく逃げ去つた。

サント・クロアは約束した通り抵抗しなかつた、暫らくの間彼は群集に包圍されながら警部の後から隨いて行つた。群集はその好奇心を士官に向け初めたのである、オルロージュの埠頭

五

六
で、巡査の一人が前にはそこに見えなかつた一臺の馬車を呼んだ。サント・クロアは前に述べたと同じ傲然たる嘲笑的な態度で馬車の中へ入つた。彼の傍には警部が坐つて二人の巡査は後に立つた、そして他の二人の巡査は上官の命令通りに御者に、『バスタルへ！』と指圖するとその場を立去つた。

二 騎士と侯爵夫人

このサント・クロアとは何者であるか？ 讀者をしてこの物語に於て最も重要な地位を占むるこの青年士官を熟知せしめむがために、今少しく彼の経歴を述べよう。サント・クロアの祖

先は知られてゐない、一説によると、彼は非常に偉い貴族の落胤だといふし、一説によると、貧乏人の子供だといふ事である。そして彼は祖先が分るのが嫌だから、わざと、その不名譽な評判に甘んじて。事實さうではないのにさうであるやうな顔をしてゐるといふ事である、兎に角確實に分つてゐるのは、彼がモントオパンの生れで、現在の身分はトラシー聯隊の大尉だといふ事だけであつた。この物語が始まる頃、即一千六百六十五年の末には、サント・クロアは二十八九の、見るからに快活な綺麗な若者で、交際社會では陽氣な相手であつて、立派な大尉だつた。彼は他人と一緒に遊ぶのが好きで、善行をも遊蕩的

な行爲をも共に樂ひと云つたやうな派手な性格をもつてゐた。戀愛に於ては彼は非常に疑ひ深かつた。たとへ遊女でも、その女が彼の氣に入らうものなら、狂氣になるほど嫉妬深くなつた。彼は収入が無かつたにも拘らず豪遊を極めた、それから彼は些細な事をも非常に氣にかけた。これは彼の生れが曖昧であるためであつた。人がどうかして祖先の事でも話し出さうものなら彼は自分を故意に辱めるためにそんな事を云ふのだと氣を廻すのであつた。

さて、彼はどういふ事情で現在のやうな状態になつたか、それに就て述べなければならぬ。一千六百六十年の頃、サント

クロアは軍隊にゐるうちに、ノルマンデー聯隊の司令官ブランヴェイリエル侯爵と知合になつた二人は年配が同じだつたから随つてその生活ぶりも同じく、二人がはたらく善行も悪業も同じであつた。そこで單純な相識の關係が友情となり、侯爵が戦地から歸ると、サント・クロアを自分の妻に紹介したので、彼はブランヴェイリエル家の家族と親しい間柄になつた。ブランヴェイリエル夫人はその時二十八で、侯爵と結婚したのは一千六百五十一年——即ち九年前であつた。彼女は名をマリイ・マデレーヌと云つて、姉が一人、兄が二人あり、父親のドリエー・ド・オペレーはバリシヤテレー監獄の副典獄であつた。夫人は二十

八の年には美しい盛りで、小柄だが、よく釣合のとれた身體で、その丸い顔は非常に美しかった。その顔の美はどんな感情によつても變らないかと思はれるほどいつも落着いてゐて不思議に生命を附與された彫像の線を思はせた。冷たい残忍な落着といふものは良心の苛責を隠すマスクとして役立つもので、それはやゝもすれば良心のある落着と間違へ易いものである。

サント・クロアは一目見ると侯爵夫人と戀に陥つた。そして彼女はやがてサント・クロアの情人になつた。夫のプランザイリエル侯爵は、この時代の趣味にしか適合しない夫婦間の道德觀を抱いてゐたものと見えて、自分の眼前に行はれてゐる事柄

よりも自分の快樂に心を占領せられてゐたものと見えて、サントクロアに對しては嫉妬がましい邪魔をしなかつた。そして破産をした後までも愚かな浪費をつゞけてゐた。そこで彼の家庭は紊亂し、妻の侯爵夫人は新たな情熱を擅まゝにせむがために、離婚を要求した。やがて彼女は夫の家を出て、無分別にもサント・クロアと一緒に到る所の公衆の席に現はれるやうになつた。當時貴族の間にはこんな事はよくある事だつたので、プランザイリエル侯爵もそれを何とも思はなかつた。そして自分は妻の行爲などは少しも心に懸げずに、相變らず愉快げに破滅の道を追求してゐた。しかし、夫人の父親ドリユー・ドオプレーはさ

うしてはゐられなかつた。彼は法律の權威を重んずる事に於て實に細心であつた。彼は娘の行爲を非常に耻辱であるとし、自分の名を汚すのを怖れ、サント・クロア捕縛の勅許書を得た。それにはこの勅許書持參者は何處であつても見附け次第サント・クロアを捕縛し得と記されてゐた。かくして、サント・クロアは捕縛されたのである。彼が侯爵夫人の馬車に同乗中如何にして警官の手に捕はれたか、侯爵夫人が如何に注意深く人目を避けてゐたかは、既に讀者の知るところである。

三 殺人鬼エキヂリ

サント・クロアが町の真中で捕縛された時、如何にその憤怒を押へるのに大自制心を用ひたかは、彼の性格から判断すれば、想像するに難くない。護送の途中も彼は一言も口を開かなかつたが、彼の胸中には暴風雨がやがて勃發せむとして鬱積しゐたに違ひない。しかし、彼は恐ろしい獄門の扉の開け閉てにも同じ無頓着を示してゐた。彼は典獄から問はれた形式的な質問に答へた。彼の聲は穩かであつた。看守等が彼に帳簿を渡すと彼はしつかりした手つきでそれに署名をした。と、直ぐ一人の看守が典獄の命を奉じて、彼を引張つて行つた、日の目の射さぬらしい冷たい濕っぽい廊下を幾つも通つて、とある監房の前へ

行くと、看守はそこの戸を開けた、サント・クロアが監房の中へ入るや否や、錠の下ろされる音を聞いた。

錠のギイ／＼いふ音を聞くと彼は振り返つた。看守は燈火もつけずに彼をただ獨り残して立去つた。床から高さ八九尺の所に格子窓があつて、そこから月の光がさし込み、みすばらしい車附きの寢臺を照らしてゐるが、部屋他の部分は眞暗で分らない。サント・クロアは暫らくの間凝つと立つて、耳を澄ました。やがて足音が遠くへ消え去るのを聞き、たうとう自分がたゞ一人になつた事を知ると、彼は人間の聲といふよりも寧ろ野獸の吼えるやうな聲で泣き出した。彼の楽しい生活を彼から奪

ひ取り、彼を牢獄へ放り込んだ人間を咀ひ、そんな事をさせた神を咀ひ、彼に復讐をさせ、自由を與へよと何ものかに向つて聲高かに叫んだ。

その途端に、恰も彼の言葉で地の底から呼出れたやうに、一人の男が窓からさす青白い、髪の毛の長い、黒い胴衣を着た男で、サント・クロアが横はつてゐる寢臺の裾へと近づいた。彼は自分が大膽だつたから自分の祈禱に答へてこの妖怪が出て來たのだ、(當時は魔法の力など、ふもものがまだ一般に信せられてゐたのだ)と思つた。始終人間の近くにある人類の仇敵の頭梁が彼の聲を聞きつけ、彼の祈禱に答へて出て來たのだと思つた。

彼は寢床の上に坐り、二時間前まで劍の柄があつた腰のあたりを思はずかい探つたが、不思議な妖怪が一步々と彼に近づくので、彼は毛髪が逆立ち、冷汗が顔に流れるのを感じた。たうとう妖怪は立停つた、妖怪と彼は一瞬間相面して立つた。と、怪しい男は陰鬱な調子で話した。

『若衆』と彼は云つた、『お前はお前を虜にした男に復讐をさせてくれと悪魔に祈つたね。お前を見棄てた神に逆つて助を乞ふたね。俺はその手段をもつてゐる。俺は今それを授けに來たのだ。お前はそれを受取る勇氣があるか？』

『何よりも先づ』とサント・クロアが訊いた、『君は誰だ？』

『どうして俺が誰であるかを知る必要があるんだ』と見知らぬ男が答へた。『今俺はお前の呼ぶのに答へて出て來て、お前の欲するものを持つて來たのぢやないか？』

『けれども』とサント・クロアはやはり妖怪と對座してゐるのだと思つて云つた、『かういふ契約をする場合には、人は相手を知りたいものだ。』

『うむ、どうしても知りたいんなら云ふが』と見知らぬ男は云つた。『俺は伊大利人 エキジリだ。』

サント・クロアは超自然的な幻覺から怖るべき現實へと眼醒めて、新たな戦慄を覺えた。『彼が今聞いた名は、當時佛蘭西の

みならず伊太利でも有名な怖ろしい名であつた。エキジリは多くの毒殺犯として告發され、羅馬を追はれたのだが、而も彼に對してその毒殺の證跡を満足に擧げる事が出来なかつたのである。そこで彼は巴里に来て、そこでもこの故國に於けると同じく彼は當局者の注目するところとなつた。しかし、巴里でも羅馬でも彼はなかく有罪にならなかつた。が、證據は不充分であるが、彼の兇行は誰にも認められ、彼の逮捕を狐疑する者はなかつた。彼を捕縛すべき勅書が出た、エキジリは逮捕されてバスタルへ投せられた。エキジリはサント・クロアよりも六ヶ月前からそこに入つてゐたのである。當時は囚人の數が多かつ

たので、典獄は新たな囚人を古い囚人と同じ部屋に入れたのである。エキジリとサント・クロアが好一對の悪魔である事を知らずに友達にしたのである。さて、これで讀者は萬事を了解せられたであらう。サント・クロアは看守によつて燈火の無い部屋へ入れられたので、暗闇の中に彼の仲間のゐたのが見えなかつたのだ。彼は憤怒に身を委ねたのである。所が、彼の呪咀の言葉はエキチリに向つて彼の心の状態を説明したのであつて、エキチリは忽ち忠實な強い弟子を得る機會を擲んだのだ、この弟子は一度牢獄から出たら、たとへ自分が終身入牢の憂目を見ても、エキチリを救ひ出してくれるかも知れないのであつた。

二〇
尠くとも彼の運命に對し復讐してくれるかも知れないのであつた。

サント・クロアの同房囚に對する嫌悪は長くは續かなかつた。そして、聰明な師匠はその弟子に込見みを附けた。善良と惡徳の不思議に交り合つた性格を持つてゐるサント・クロアは、この時暗黒の力が勝つか光の力が勝つかと云ふ彼の生涯の最も危険なる危機に遭遇した。若しこの時彼が天使のやうな人に出遭つたならば、多分彼は神へと導かれたであらう、然るに彼は彼を惡魔王へと導いた惡魔に出遭つたのである。

エキジリは平凡な毒殺者ではなかつた。彼は毒に關する藝術

家であつた。彼にとつては殺人は一つの藝術であつて、彼が人を殺すのに利害關係からではなく、經驗に對する趣味からするのである。神は人間の生命を創造したが、エキジリは人間の生命を破壊するのだ。彼は人間の生命を破壊する事によつて神と同地位を保つてゐるのだ——かうエキジリは信じてゐた、それがエキジリの誇りであつた。彼は世にも恐ろしい殺人鬼であつた。

さすがにサント・クロアも曹らくは躊躇した、が、たうとう彼はエキジリの魔力に屈服した。エキジリは種々の薬品を彼に教示した、その或るものは緩慢な作用を有し、それを飲む者は

長い間、苦んで徐々に死ぬといふのであつた。その或るものは激烈な作用を有し、それを飲む者は叫び聲一つ挙げ得ずに立所に死ぬといふのであつた。サント・クロアはだんくといふこの物凄いい科學に興味を持つやうになつた。そして師匠なくして自分一人ですれ等の藥品を作る事が出来るやうになつた。一年後サント・クロアはバスチルを出たが、その取彼はその師匠と殆んど同様の技術を有するやうになつた。

彼は、果してこの恐ろしい技術を何人に試みむとするのであるか？

四 父の毒殺

サント・クロアは恐るべき秘術を土産として彼を追放した社會へ歸つた。その後問も無くエキジリも釋放されて——どうして釋放されたかは判らないが——サント・クロアを探し出した。サント・クロアにエキジリを自分の執事のマルタン・ド・ブリユール名義で、自分の部屋にかくまつた。彼の借りてゐた部屋はモオベール街の袋町にあつて、ブルネットと云ふ婦人の所有に屬してゐた。

サント・クロアが入獄中にブランヴァイリエル侯爵夫人に會ふ

機會があつたかどうかは知らないが、彼が釋放されるや否や、戀人同志が前よりも一層接近し合つた事は確かである。彼等は今度の經驗によつて、二人の怖るべきものが何ものであるかを知つた。そこで彼等は直ちにサント・クロアの新たに得た智識を試験せんと決心し、その第一犠牲者として夫人の父デオブーを選んだ。それが成功すれば、夫人は父親の嚴格なる監視を免れてより自由に戀人との逢瀬を楽しみ、父親の遺産を貰つて夫が浪費した彼女の財産を償ふ事が出来るのであつた。しかし、かゝる大膽な計畫を實行するには、結果が極めて確實であるかどうかを知る必要がある。彼女は前以て他人を犠牲にして藥

藥の効果を試みやうと決心した。そこで或る日、中食後下女のフランソア・ルツセルが居間へ入つて来た時、彼女は一片の羊肉と砂糖漬の莓とを與へた。下女はそんな悪企があらうとは夢にも知らず、女主人の與へたものを喰べたが、直ぐ彼女は病氣になり、激しい腹痛と、ピンで刺されるやうな胸の痛みを訴へた。が、下女は死ななかつたので、侯爵夫人は毒がもつと強くなければならぬ事を認め、それをサント・クロアにへ返した。サント・クロアは二三日すると他の藥を彼女に與へた。いよく實行の時が来た。ドオブレは仕事の疲れを休めるために、オフモンといふ彼の城で一日を過すことゝなつた。侯

爵夫人は父親と一緒に行くと言ひ出した。ドオブレは當時はもう娘とサント・クロアの關係が全然断たれてゐると思つてゐたので、喜んで彼女と一緒に連れて行く事にした。オフモンはかういふ犯罪を行ふには屈強の場所であつた。そこはコンピエーニュから三四哩離れたアイギユの森の中にあつて、薬の効果が現はれた後、急には助けを呼ぶ事が出来ない土地であつた。ドオブレは娘と召使を一人連れて出發した。侯爵夫人は未だ嘗て、この時ほど父親に親切にし、よく父親の面倒を見た事はなかつた。ドオブレは、基督のやうに——基督には子供はなかつたが父親の心を持つてゐた——悔改めた娘を無垢の子供

よりも尙一層愛した。そして侯爵夫人は、持前のかの恐ろしい落着いた表情を利用した。彼女は始終父親と一緒に隣の室に眠り、食事と一緒にし、何くれとなくよく面倒を見て、何事でも他人にはさせなかつた。彼女は始終にこくしてゐたので、どんなに疑深い人の眼でも彼女の顔を見れば、子としての愛情の他には何ももの見出す事が出来なかつた。彼女の心の底に兇悪な計畫が隠されてゐやうなど、は誰にも思へなかつた。かういふ假面を冠つて、或る晩彼女は毒の入つた肉汁を父親にすゝめた。父親はコップを手に取上げた。彼女は父親がコップを口へ持つて行くのを見た。肉汁を飲み下すのを見た。が、彼女の

鐵面皮な顔には、内心の怖ろしい不安は少しも現はれなかつた。父親が肉汁をみんな飲んでしまふと、彼女はしつかりした手附でコップや臺皿を持つて、自分の部屋へ歸り、耳を傾けて、待つてゐた……

藥の効目は忽ち現はれた。侯爵夫人は父親の呻くの聞いた、それから悶え苦む聲を聞いた。父親は遂に苦痛に耐へられないで、娘を呼んだ。夫人は父親の所へ行つた。その時彼女の顔には漸く不安の色が現はれた。父親は軽い病氣だと考へたらしく、醫師を煩はしたくないと云つた。所が、やがて彼は激しい吐血を始め、耐へ難い苦痛を感じて、とう／＼醫師を呼びにやつて

くれと娘に頼んだ。翌朝の八時頃になつてやつと醫師がやつて來たが、その時までには科學的試驗によつて病氣の原因を探求し得べき證據物や徴候はすべて無くなつてゐたので、醫師はドオプリーの訴へによつて、胃病であると判断するより他には何の原因をも發見し得なかつた。そこで醫師は投藥して、コムビエーニユへ歸つて行つた。

その日終日、侯爵夫人は病人の傍を去らなかつた。夜になると父親の部屋へ自分の寢床を取らせ、自分の他には誰も父親の傍にゐてはならぬと命じた、かくして彼女は病氣の経過を見守り、自分の眼で父親の身體の中に起る生と死の争闘を見た。翌

日醫師が又やつて来た、ドオブレの容體は悪くなつてゐた、嘔氣は止んだが、胃の痛みが更に激しくなつた、奇怪な火が彼の生活力を焼いてゐるかのやうに見えた、醫師は巴里に歸つて手當をせよと命じた。ドオブレは非常に衰弱してゐるのでコムピエーニユまで行かうと云つたが、娘が巴里へ歸つたらもつといふ手當が出来たらうと云つて熱心に勧めたので、終にドオブレは巴里へ歸る決心をした。彼は自分の馬車で娘の肩に寄りかゝつて旅行した、夫人の態度は前と少しも變らなかつた、とうとうドオブレは巴里に着いた。

萬事が侯爵夫人の思ひ通りに行つた、今や舞臺が變つたので

始めに病氣を診察した醫師は死の床に侍らぬ事となつた、發病來以の経過を研究して病氣の原因を發見し得る者は誰もない、研究の線は二つにぶつつきり切れた、そしてその兩端が再び結び附くには距離が餘りに離れてゐる。凡ゆる手段を盡して手當をするにも拘らず、ドオブレの容體はだん／＼悪くなつた、夫人は自分の使命に忠實で、一時間と父親の傍を離れた事はなかつた。遂に四日間苦みつゞけて、ドオブレは娘の腕に抱かれ、自分を殺した女を祝福しながら死んだ。夫人は我れを忘れて悲んだ。彼女の泣き悲む有様は、傍にゐる兄たちが冷淡に見えるほどにも激しかつた。誰一人として犯罪を疑ふ者がなかつ

た、で、死體も検死されずに濟み墓は閉され、彼女に嫌疑をか
ける者は誰もなかつた。

三二

五、從僕ラシヨーゼ

しかし、ブランヴェリエル侯爵夫人の目的はまだ半分しか達
せられなかつた。彼女は今迄よりも戀の自由を得るやうになつ
たが、父親の死は彼女の期待した程都合のいゝものではなかつ
た。父親の財産の大部分は、長兄と裁判所の參事官なる次兄の
手に渡り、侯爵夫人の状態は、財産の點に於ては以前と少しも
變りはなかつたのだ。

サント・クロアは相變らず華やかな陽氣な生活を送つてゐた。
誰も彼を金持だと思ふ者はなかつたが、彼はマルタンと呼ぶ執
事を有し、ジョーヂ、ラビエル、ラシヨーゼと稱する三人の從
僕を使つてゐた。その他幾つかの馬車を持つてゐる上に、夜外
出する時はいつも定つた從者を連れてゐた。彼は若くて綺麗だ
つたから、何人もどうしてそんな贅澤が出来るかを怪む者はな
かつた。その當時は容貌のいゝ若い紳士は何不自由なく暮らせ
るやうな習慣になつてゐたのだ。サント・クロアはその生涯に貴
族や、金持やその他種々の人と交つたが、金持の中にペナウチ
エルと稱する僧侶の歳入徴收役長で、ラングドック管區の會

計をしてゐる男がゐた、この男は金満家で、金の方でいつも成功し、どんな六ヶ敷い事でも金の方でうまく處理して行くといふたちの男であつた。このペナウチエルは一等書記のダイベルと仲間で事業をしてゐたが、ダイベルは突然卒中で死亡した。この頓死はダイベルの家族よりもペナウチエルの方が先きに知つたが、そのうちに仲間がやつてゐた事業の状態に関する書類が紛失した、誰一人としてそれがどうなつたかを知る者はなかつた。それがためにダイベルの妻子は破産した。マダダレーヌの牧師を勤めてゐたダイベルの義弟に當る男が、ダイベルの死因に就て疑を抱き、それを探究したいと思つた、

そして探究に着手したが、途中で彼も死んでしまつた。

前述の如くこのペナウチエルとサント・クロアとは親交があつた。で、サント・クロアの収入に就て疑ひを抱く者は、彼とペナウチエルが仲間で何か仕事をしてゐるのだらうと想像した。喪期が経過すると、侯爵夫人とサント・クロアの関係は以前のやうに公然續けられた。夫人の二人の兄は、カルメリット修道院で尼になつてゐる年を老つた姉を通じて、夫人に意見をした、夫人は父親が死ぬ時二人の兄に彼女の監督を頼んだ事を知つたかくして、彼女の第一の犯罪は何の効果もなかつたのである、彼女は父の譴責から免れ、父の財産を得んと企てたのだが、財

産の大部分は兩兄の手に歸し彼女は負債を償却することさへ出来なかつた。そして、一方では、兄が新たに彼女の譴責者となつて、殊に兄の一人は副典獄であつたから、再び彼女の戀人から隔離する権力をもつてゐたのである。彼女はどうしてもそれを防止しなければならなかつた。サント・クロアの從僕であつたラシヨールは主人から解雇せられた、そして侯爵夫人の差金で副典獄をしてゐる長兄と一緒に暮らしてゐる次兄の從僕として住み込んだ。今度盛る毒藥は父親の時のやうに急激に死に至すものであつてはならない、何となれば同じ家族の中にさう度々變死者があつては、嫌疑をかけられる怖があるからである。も

う一度藥の効目を試験する事となつた、動物で試験をすればわけはないが、動物と人體では組織が違ふから、ひよつとして間違ひがあつてはならないので、此度も以前と同じやうに人體に試験をする事となつた。以前と同じやうに極くやくざな人間を犠牲者とする事となつた。

侯爵夫人は、敬虔な慈善心の厚い貴婦人として有名であつた、彼女はよく貧民に施しをした、それから又他の貴婦人と協力して貧民の病人を救つた、彼女は度々病院へ出掛けて行つて、そこへ入つてゐる貧しい病人に葡萄酒やその他の贈物をしたので、彼女がいつものやうに貧民病院へ姿を現はした時、誰もそれを

怪むものはなかつた。その時、彼女は快復期に向つてゐる病人たちにビスケットと菓子を持つて行つてやつたが、この贈物はいつもの通り非常に感謝された。一ヶ月経つと、彼女は再び病院を訪れて、彼女が特別に興味をもつてゐる、かの病人たちの容體を訊いたが、彼等は餘病を發して、頗る重態であるとの事であつた。彼等は不思議にも徐々に衰弱して死に近づき行くのであつた。夫人は醫師に質問をしたが、醫師も病因が分らないので、手當の仕様がなと答へた。二週間後に彼女は又もや病院を訪づれたが、その時病人の或る者は死亡し、或る者は瀕死の状態にあつた。二ヶ月後には、彼等は全部死亡した、醫師は死

體解剖の結果、やはり病因を確むる事が出来ないので、當惑してゐた。

試験は成功した、そこでラシヨーゼが秘密の命令を實行する事となつた。或る日、副典獄がベルを鳴らした。前述の如く次兄の參事官に仕へてゐたラシヨーゼが召に應じてやつて來た。副典獄は秘書官のクーステと共に仕事をしてゐたが、水を割つた葡萄酒を一杯くれとラシヨーゼに命じた。ラシヨーゼは直ぐにそれを持つて部屋へ入つて來た。副典獄はコップを唇へ持つて行つたが、一啜り啜ると、それを押しやつて、かう叫んだ。「貴様は何を持つて來たのだ、馬鹿者！ 俺に毒を飲ませるん

だ。』そして彼はコップを秘書官に渡して、言ひ添へた、『クリ
ステ君、一寸これを見たまへ、これは何だね。』秘書官は珈琲を
匙に二三滴入れて、臭ひを嗅ぎ口へ持つて行つた、その飲料は
硫酸の臭ひと味がした。ラシーゼは驚いて秘書官に近づき、今
朝参事官の従僕の一人が薬を飲んだから。その時使つたコップ
をそれと知らずに持つて來たのだらうと辯疎した。彼は秘書官
の手からコップを受取つて、唇へ持つて行き、飲むまねをして
何か臭ひがするから、さつとさうに違ひないと云つた。そして
彼は葡萄酒を爐邊に棄てた。

四〇

六、兄の死體の解剖

副典獄は葡萄酒の効目が現はれるほど飲まなかつたので、直
ぐにこの出來事を忘れてしまつた。サント・クロアと侯爵夫人は
間違ひをやつた事に氣が附いて、他の方法を用ひる事に決心し
た。

好い機會がなくて三ヶ月が過ぎ去つた。終に一千六百七十年
の四月の始めに、副典獄が弟と共に復活祭の休日をボースとい
ふ田舎で過す事になつた。ラシーゼは主人と一緒に行つたが
出發の際、父もや夫人から命令を受けた。

四一

一行が田舎へ着いた翌日、中食に鳩肉饅頭が出た。それを喰べた七人の人は食後氣持が悪くなつたが喰べなかつた三人の者は何ともなかつた。最も毒の効目が現はれたのは副典獄と、議員とであつた。副典獄は一番澤山喰べたためか、それとも以前に舐めた薬が助けたのか、第一に吐血した、二時間後に議員も同じ徴候を現はした。此度も醫師の骨折が無益に歸した。四月の十二日、毒を喰べてから五日目に、副典獄とその弟は巴里に歸つたが、彼等は永い間重い病氣に罹つてゐたとしてもいふやうに變り果てゝゐた。プランヴェイリエル夫人は當時田舎にゐた。彼女は兄の病氣中歸つて來なかつた。醫師たちは副典獄の容體

を一目見ると、希望がないと云つた。徴候は父親の時と同じで醫師たちは家族に何か不明の病氣があるのだらうと想像した。彼等は回復の望みが全然無いと宣告した、全く、彼の容體は日に日に悪くなるなり、食物をすべて受附けず、不斷の吐血に苦しんだ。死ぬ前三日の間といふものは、胸の中が焼けるやうだと云つて苦痛を訴へた。遂に一千六百七十年の六月十七日に、彼は死亡した。彼はその事業を完成するのに、七十二日かゝつたのである。

疑惑の雲が漸くたゞよひ始めた。副典獄の死骸は解剖に附せられ、報告書が起草された。解剖は、チエブレ、チエラント、ガ

ヴァール等の外科醫が立合つた。兄弟の主治醫なるバシヨ一の執刀の下に行はれた。彼等は胃と十二指腸が眞黒になり、ぼろ／＼に切れ、肝臓が焼けて、腐爛してゐるのを發見した。かゝる状態は毒のために惹起されたに違ひないと彼等は鑑定した。しかし時とするや或る體液の存在のために同じ状態を來す事があるからと云つて、彼等は副典獄の死が自然の原因によつて來る事が不可能であるとは斷言する勇氣がなかつたので、それ以上の研究を遂げずに、彼は葬られた。

醫師バシヨ一が副典獄の死體解剖を乞ふたのは、彼の主治醫としてゝあつた。バシヨ一は、弟も兄も同じ病氣に罹つてゐる

と思つたので、兄の死によつて弟の生命を保持する何かの手段を見附出したいと希望したのである。兄の參事官は激しい熱に苦しんでゐた、彼は二三分間續けて同じ姿勢をとつてゐる事が出来なかつた。彼は斷えず呻き苦しんで、三ヶ月後に死亡した。彼の胃、十二指腸、肝臓等は、兄の場合と同じく腐爛し、且つ身體の皮膚さへも焦げたやうになつてゐた。醫師の診斷によると、これは毒殺の徴候であるが、時とすると、體液變常によつてこれと同じ結果を生ずる事があるといふのであつた。ラシヨ一は疑はれるどころか、病氣中よく看護をしてくれたといふので、主人の遺言により百圓を貰ひ、その上にサント・クロアと

侯爵夫人から千圓の謝禮を受取つた。

一つの家族に、一時にかゝる災厄が下つたといふのは、悲みであるばかりでなく驚愕である。死は憎悪を知らない、死は聾者であり盲目である、人々はこの無慈悲な災厄に驚いたが、誰もその眞の犯罪者を疑ふ者はなかつた、探索は不結果に終り、訊問は何の効果もなかつた、侯爵夫人は二人の兄のために喪服を着、サント・クロアは相變らず愚かな生活を送つてゐた。そして萬事が以前のやうに進行した。

これより先き、サント・クロアは牧師のサン・ロオランと知合になつた。このサン・ロオランは、嘗つてベナウチエルが彼の地

位を羨んでそれを買取らうとして失敗した人である。ベナウチエルはその後養父に當る牧師レスクの後繼者となつたが、後繼者になると間もなくレスクが頓死した。そこで彼はラングドック管區に於て第二位を占め、莫大の財産を我ものにした、しかし、彼に尙サン・ロオランの地位を望んでゐた。所が、こゝに彼がそれを得る機會が來た。サン・ロオランがサント・クロアの所からジョーヂといふ従僕を雇入れて二三日すると、彼は病氣に罹つた。彼の病氣はドオブレー父子の場合と同じ徴候を現はした、否、それよりも急激で、二十四時間で絶命した。サン・ロオランはドオブレー父子と同じ怖ろしい苦痛に悩みつゝ、死亡し

四八
た。彼が死んだ日に裁判所の役人がやつて来て、彼の死に就て一仔一什を聞取つた。そして病氣の徴候を話すと、その役人は召使たちの前で公證人のサンフレーに向ひ死體を檢視する必要があると言つた。一時間ほどするとジョーヂが誰にも何にも云はず給金を受取らずに居なくなつた。嫌疑が深くなつた、が、又もやそれは曖昧の中に葬られた。検屍の結果、特に毒殺であるとの斷定を下すには證據が不充分であつた。腸はドオブレー父子の場合のやうに毒がそれを焼焦する暇がなかつたので、蚤が喰つたやうな赤い點を現はしてゐた。一千六百六十九年の六月に、ペナウチエルはサン・ロオランの占めてゐた地位を得た。

七、騎士の變死

所が、サン・ロオランの妻は、従僕ジョーヂの逃亡によつて疑惑を抱き始めた。何かと思ひ合せて見ると、どうもジョーヂが疑はれるのであつた。サン・ロオランの友人に一人の僧侶があつた。彼はジョーヂの逃亡した事を知つてゐたが、それから五六日経つて、彼はソルボンヌに近いマーソン街でジョーヂに出遭した。二人は町と同じ側を歩いてゐたが、折柄枯草を積んだ一臺の荷馬車が通りかゝつて、通行の邪魔をした。ジョーヂはふと頭を擧げて、かの僧侶を見附けた彼は僧侶が亡き主人の友人

である事を知つてゐるので、荷馬車の下を這つて向側に出た。彼は僧侶を見ると、自分の罪を憶ひ出し、罪の報を恐れて、車の轍に轢き碎かるゝ危険を物ともせず、逃げ出したのである。サン・ロオラン夫人はジョーヂを告發した、で、到る所を搜索したが、彼の行衛は知れなかつた。

かくも突然にして原因不明なる變死が相繼いで起つたといふ噂が巴里中に擴がつたので、市民は恐怖を抱き始めた。相變らず陽氣な生活を送つてゐたサント・クロアも、方々の應接間でこの噂に出遭ひ、やゝ不安を感じ始めた。事實、嫌疑はまだ彼の身には及んでゐなかつたけれども、用心をする必要があつた、

で、サント・クロアは不安から免れる方法を講じようとした。當時侍従武官の椅子の一つが間もなく空くといふ噂があつた。その地位を買ふには五萬圓の金が必要であつた。そこで彼はそれを買ふために、ベナウチエルに金策の相談をした。この金策は困難であつた。金額が大きい上に、ベナウチエルはもうサントクロアの助力を必要としてゐなかつた。彼は自分の望んでゐた遺産や地位を全部手に入れてしまつたのである。で、彼はサントクロアに素氣ない返事をした。

當時サント・クロアは、やはりモーベル街の袋町なるブルネツトの借間に住んでゐた。サント・クロアが彼の實驗をしたのは、

この部屋と藥劑師グラゼル家の家とである。所が、藥品を取扱つてゐた者がみんなその毒に感じた。藥劑師のグラゼルが病氣に罹つて死んだ。マルタンも怖ろしい病氣に罹つて、危く死にかけた。サント・クロア自身も加減が悪く、外出する事さへ出来なかつた。彼はグラゼルの家から爐を運ばせ病氣であるにも拘らず、實驗を續けた。サント・クロアは、その時病氣に觸れたゞけで死ぬやうな微妙な毒藥を作らうとしてゐた。彼はシヤルル七世の兄に當る皇子が、庭球の競技中に手にした毒を含んだ手拭のために死んだ事を聞いてゐた。それからジャンヌ・ダールベールの手袋の故事をも知つてゐた。その秘術は傳はつてゐ

ないが、サント・クロアはそれを再び實現したいと思つた。

然るに、その時不思議な出来事が起つた。それは偶然に起つた事ではなく、恐らく神の所罰であつたであらう。サント・クロアが爐の上に屈み、恐ろしい藥品がだんぐくと熱して行くのを見守つてゐた途端に、藥から立上る毒氣を防ぐために顔を蔽ふてゐた硝子のマスクが不意に落ちて、彼は電光に打たれたやうに床の上へ倒れた。夕食の時、彼の妻は夫が部屋から出て來ないのを不思議に思つて、戸を叩いたが、返事がない。夫が不思議な秘密の仕事に従事してゐるのを知つてゐるので、彼女は何か不時の災難が起つたのではないかと心配した。彼女は召使を

呼んで、戸を壊して部屋の中に入った。と、サント・クロアは爐の傍に倒れて、傍には硝子の破片が散らばつてゐるのだ。この奇怪な變死の事情に就て、社會を欺く事は不可能であつた、召使どもは既に死骸を見た。そしてその話をした。公證人ピカルはその部屋に封印をするやう命せられた。寡婦は爐と硝子マスの破片と取除いた他には何事をも爲し得なかつた。

この事件の評判は間もなく巴里全市に擴がつた。サント・クロアの名は名高かつた。殊に彼が宮中に於ける地位を買ふといふ評判は、彼を一層名高くしてゐたのであつた。ラシヨーゼは主人の死を最初に知つた一人であつたが、主人の部屋が封せられ

たといふ事を聞いて、彼は大膽にも次ぎの如き請求書を提出した。

請求書

拙者は七年前死者に雇傭されたる者に御座候處、拙者は二年前主人にピストール金貨百個及び銀貨百個を依託致候その金貨は窓の下にある袋の中に入れある筈にて、尙その袋の中には國會議員ドブレー氏より拙者に宛てたる三百圓の讓渡書並びに三通の受取書ある筈に候拙者は該貨幣と書類を請求仕候。

ラシヨーゼ

この請求書に對し、ラシヨーゼは封印を切る迄待ち、若し萬事が彼の言分に符合すれば、請求の品は返付するとの回答を得た。

が、サント・クロアの死によつて不安を感じたのはラシヨーゼ一人ではなかつた。かの怪しい部屋の秘密を熟知してゐる侯爵夫人は、事件を聞くや否や公證人の所へ駆けつけた。そして夜の十時であるのに公證人に面談したいと申込んだ。公證人の一番重立つた書記なるビエール・フラーテルが彼女に應接し、公證人はもう寝んでゐると云つたが、侯爵夫人はどうしても人に聞かせてはならない函を手に入れたいから公證人を起してくれと

強つて頼み込んだ。で、書記はビカールの寢室へ行つたが、やがて歸つて来て、公證人は眠つてゐるから今晩は要求に應ずる事が出来ぬと答へた。夫人はこの上争つても無駄だと思つたので、翌朝函を取りに遣すからと言ひ置いて立去つた。翌朝夫人の代理として一人の男がやつて来て、かの函を渡してくれるなら公證人に四百圓を贈ると云つた。しかし、公證人は函は封印をした部屋の中にあるのだから、封印を切るまで待つが、若し夫人の要求する物品が事實彼女の所有品であるのなら、大丈夫彼女の手に返付されるのだと答へた。この答を聞くと、夫人は雷に撃たれたやうに驚いた。もう一刻も猶豫は出来なかつ

た。彼女は大急ぎでヌーヴサン・ポールの自宅を出發し、ピクブ
 スといふ田舎の別荘へ行つた。彼女はそこへ着くと、その晩直
 ぐに又旅に出て翌朝白耳義のリエージュに到着し、その修道
 院へ入つた。

神は果してブランヴェイリエル侯爵夫人を怖るべき犯罪を所罰
 せずして見逃がすであらうか、かの怖るべきサント・クロアの密
 室には、如何なる秘密が隠匿されてゐるだらう？

八、奇怪な函

サント・クロアの密室が封印されたのは、千六百七十二年の六

月三十一日、封印を切つたのは八月八日である。關係人一同
 が立合つて今や封印を切らうとする時、侯爵夫人の委任を受け
 た一人の辯護士が現はれた。その辯護士の要求は、次の如く記
 録に上つてゐる。

ブランヴェイリエル侯爵夫人の依頼を受けし辯護士アレキサ
 ンドル・ドラマール來り、侯爵夫人の要求する函の中に夫人
 の署名ある二十四萬圓の支拂契約書在中する事あるべし、
 然しそは夫人が詐偽的行爲によつて奪はれし書類にして、
 たとへ夫人の署名の眞實なる事證せられんも、夫人は無効
 の訴訟を提起すべし。

この手續が済むと、一同はサント・クロアの密室を開くために進んだ。カルメリット派の僧侶ヴィクトランが公證人ピカールに鍵を渡した。公證人は戸を開き、關係人、軍人、寡婦等が部屋へ入つた。一同は先づ手始めに散らばつてゐる書類を一纏めにしたその内に、何處からか小さな巻紙が迂り落ちたがその巻紙の上には我が懺悔といふ文字が記されてあつた。一同はサント・クロアが悪人であると思像する理由をもつてゐなかつたので、この紙は續まない方がいゝといふ事に一決した。大狀師の代理人も同意見で、終にサント・クロアの懺悔は焼かれてしまつた。第一軍人たちの注意を牽いた物は、ブランヴィリエル侯爵

夫人の要求した函である。彼女の強硬なる要求は好奇心を煽り立てた、で、一同は先づその函を開く事にした。すべての人中に何が入つてゐるかを見るために函に近づいた、函は開かれた。函の中には何が入つてゐたか？ その説明は當日の記録に譲らう。かゝる場合の説明には、公の報告書ほど有効で、且つ恐怖を感ぜしむるものはない。

サント・クロアの居室中より一尺四方の函發見せられたり、函の表には半枚の紙を貼り付けたるものに「予の遺書」と記しあり、尙その傍に次ぎの如き文言認められたり、
「この函を手に入れし人は、何卒ヌーヴ・サンポール街に

住居するブランヴェリエル侯爵夫人に手渡しされたし、
在中物は夫人に關係あり、夫人のみに屬するものばかり
にて、夫人以外の人には誰にも役に立たぬものなり、夫
人が余よりも先きに死去せる場合には、函は在中物と共
に焼却されたし、これは予が最期の願ひにて、若しこの
願望を無視する者は、先きの世までも呪はるべし。

千六百七十二年五月二十五日

巴里にて

サント・クロア (署名)

而してこの下に次ぎの如き文言認められたり、

「ペナチエル氏に宛たる包み一つあり、これは同氏に渡さる
べきものなり」

この種の秘密品を開被する際、この場に居合はす者が如何に
深い興味を覺えたかは想像するに難くない、一同の口には好奇
心の吐聲が上つた、再び沈黙があたりを支配すると、探求の
手は進められた、記録はかう説明してゐる。

一、八つの異りたる封蠟を以て、八個所別々に封じたる一
つの紙包發見せられたり。紙包の上には、何人にも役立た
ぬ品なれば、予の死後は直ちに焼却すべきものなり。予は
これを手にせる人がこれを焼却せられむ事を懇願す、予は

これをそれ等の人の良心に委任す、決して開かるゝな。」との文字認めらる。この紙包の中には半磅の昇華物の包二つ発見せられたり。

一、六つの異りたる封蠟を以て封せられ、上に同じ文言を記せる他の包の中に、更に三つの包あり、第一の包には半オンスの昇華物を見發し、第二の包には二・二五オンスの羅馬製硫酸鹽を見發し、第三の包には燒焦せる硫酸鹽を見發す。

一、函の中には又、容量一パイントの大なる角壘ありて透明なる液體を充せり、醫師モロオ氏はこれを一見せしも、試験するに非ざれば、その性質を明言し難しと云へり。

一、沈澱物を有する半パイントの透明なる液體を充たせる他の罋あり。これに就きては醫師モロオ氏は前言を繰返せり。

- 一、阿片の塊二三個を入れたる土燒の壺一個
- 一、昇汞の粉末二ドラムを入れたる紙包一つ
- 一、俗に地獄石と稱する一種の石を入れたる函一つ
- 一、一オンスの阿片を入れたる紙包
- 一、三オンスの重量あるアンチモニー
- 一、粉末を入れたる紙包一つ、その上に「流血防止用」と記されあり。醫師モロオ氏は楳梲の花とその蕾を乾燥せし

ものなりと鑑定す。

一、六つの封蠟を以て封じたる紙包、その上に「この書類は予の死せる場合に焼却すべし」と記されあり。この包の中に二十四本の手紙封入さる。何れもブランヴェリエル侯爵夫人の手紙なり

一、六つの封蠟を以て封じたる他の紙包、その上には同前の文字記さる。この包の中には数名の人に宛たる金銀貨にて二百八十餘圓あり。尙これ等の品の他に二通の證書あり

九、ラシヨーゼの告白

薬剤師ギイ・シモンの試験の結果、サント・クロアが素養ある化学者である事が證據立てられた。而して官憲は彼がその技術を應用したに違ひないといふ疑を抱くに至つた。官憲は度々起つた變死を想起し、侯爵夫人及びペナウチエルの證書は血腥い金ではないかと疑つた。しかし、右の二人のうち一人は行衛不明であり、一人は有力者であり金満家であるので、證據なくして彼を逮捕する事が出来ない。そこで官憲はラシヨーゼの呈出した請求書に注意を向けた。

その一通は額面一萬二千圓にしてブランヴェイリエル侯爵夫人の署名あり、他の一通は額面四千圓にしてペナウチエルの署名あり、日附はドオブレー及びサン・ロオランの變死せる日に符合す

右の記録に就て見るに、サント・クロアは場合によつてその謝禮金に差異を附けた事が分る。親殺しは普通の殺人よりも高い謝禮金を拂はねばならなかつたのだ。

官憲は先づサント・クロアの残した薬品を分析し、動物試験をなす事に決した。藥劑師ギイ・シモンが薬品の分析と動物試験を委任された。

請求書中には、ラシヨーゼは七年間サント・クロアに仕へてゐたと記されてゐる、故に、彼はドオブレー家にゐた期間を右の雇傭期間中の中止期であると考へてゐないのだ。請求書中にある金子と證書は指示の場所に發見された。これに依つて見るにラシヨーゼはかの密室を熟知してゐたに違ひない。果して熟知してゐたものとすれば、彼はかの函をも知つてゐる筈だ。函を知つてゐるとすれば、彼は無辜の人間であり得ない。以上の事實は、副典獄の未亡人マンゴー・ドヴイラルソをして彼を告發せしめるに充分であつた。そこで令狀が執行せられ、ラシヨーゼは逮捕された。それと同時に彼の手許からも毒藥が發見せら

れた。

シヤトレー監獄で裁判が開かれた。ラシヨーゼは頑強に犯罪を否定した。裁判官は證據が不充分だと考へて、豫審拷問に附すべき旨を命じた。當時の拷問には判決の前に行はれるのと、判決後に行はれるのと二種あつた。第一の場合(豫審拷問)には嫌疑者は自分の生命を救はんがために怖ろしい苦痛を耐へ事實を白状しない事が往々ある。第二の場合には、もう救はれる望がないから、苦痛を免れんために罪を自白するのだ。で、未亡人マンゴは、ラシヨーゼが拷問に耐へる力を持つてゐる場合には事實を白状せずして、罪を免れるだらうと裁判官に訴へた。

そこで裁判官はこの訴願を採用して、千六百七十三年の三月四日、ジャン・アムラン・ラシヨーゼの副典獄及び參事官毒殺事件を有罪なりと判決し、彼は共謀者發見の目的をもつて普通拷問と特別拷問とに附せられたる後、車輪に掛けて生きながら身體を割かるゝ残酷な刑罰に處せらるゝ事となつた。

ラシヨーゼは『ブート』と稱する拷問に附せられた。これは一枚の板の間へ兩脚を挟んで、楔を打込んで足を締附ける拷問であつて、普通拷問は楔が四本だが特別拷問は八本といふ事になつてゐた。三本目の楔を打込むとラシヨーゼは白状すると云つた。そこで拷問を中止し、禮拜堂の内陣に運ばれ、布團の上へ

臥かされたが、彼は弱々しい聲で——彼は口を利く事が出来なかつた——元氣がつく迄三十分待つてくれと哀願した。例によつて、彼の拷問執行の記録を左に掲げる。

ラシヨーゼは拷問を釋放され、布團の上に横はり書記は休息す。三十分後に、ラシヨーゼは歸宅の出来る様取斗らひくれよと乞ひたる後、彼が罪を犯せし事、ブランヴェイリエル侯爵夫人が彼女の兄に飲ますべき毒藥をサント・クロアに與へたる由を彼から聞きし事、彼はその毒藥を永及び肉汁の中に入れし事、赤色液は巴里に於て副典獄のゴツプの中へ入れ、透明液はウイルクオイに於て肉饅頭の中へ入れ

し事、サント・クロアは彼を將來雇傭し、金千圓を與ふると約せし事、彼が、サント・クロアに毒の効果を報告せし事、サント・クロアが五六度液體を彼に與へし事等を自白せり。ラシヨーゼは又、サント・クロアが侯爵夫人は彼の他の毒藥に就ては何事も知らずと語りしも、彼女は屢々毒藥に就てラシヨーゼに語りし事あれば、彼女はそれを知りたるに違ひなき事、侯爵夫人は彼を追拂はんとし若し出て行くならば金を與へると云ひし事、侯爵夫人が函とその内容に就き彼に尋ねし事ありたる事、若しサント・クロアが誰かをドオブレー夫人(副典獄の寡婦)の召使として同家に入れる事

を得しならんには、彼は夫人をも毒殺せしならん（何となれば彼は夫人の娘に懸想しむればなり）事等を自白せりこの告白は一點の疑惑をも挾む餘地がなかつたので、直ちに次ぎの裁判が開かるゝ事となつた。高等法院の記録には次ぎの如く記されてゐる。

一千六百七十三年三月二十四日に執行されし拷問の報告中に現はれたるジャン・アラムン・ラシヨールゼの宣言と自白に據つて、裁判所はバルギース、マルタン、ポアートヴァン、オリヴィイエール、ウエロンの父、假髮製造人ケスドンの妻等の人々を訊問のため證人として召喚し、ラビエル逮捕

の令狀を發し、且つペナウチエルを召喚せり。

ペナウチエル、マルタンサン（トクロアの執事）、ベルギース（サント・クロアの友人）の三人は、四月の二十一日、二十二日、二十四日に取調べられた。七月二十六日にペナウチエルは釋放された。ベルギースに就ては更に證據の必要が認められた、マルタンは逮捕された。三月二十四日にラシヨールゼは刑を執行され、車輪に掛けて裂き殺された。すべての罪惡の端緒を開いたエキジリは、どうなつたか彼の消息は傳へられてゐない。その年の末にマルタンは證據不十分のため釋放された。

一〇、侯爵夫人の逮捕

プランヴェイリエル夫人はやはり白耳義のリエージュに滞在してゐた。彼女は修道院に閉ぢ籠つてゐたが、決してこの世の快樂を見棄てゝはゐなかつた。彼女はサント・クロアのためには身を殺してもとまで思ひ込んでゐたのだが、彼の死は却つて彼女に慰めを與へた。彼女はテリアと呼ぶ新たな戀人を得た。この男の事は裁判の記録の中には五六度出て来るだけで後世に傳へられてゐない。

彼女の犯罪がだん／＼明瞭となつたので、官憲は彼女の隠家

を突止めて、彼女を逮捕する事に決した。それは甚だ困難で、且つ極めてきはどい仕事であつた。警官中で聰明の聞え高きデグレイがこの任に當つた。デグレイは年の頃三五六の、容貌端麗の男で、その顔には少しも警官らしい所がない、彼はどんな着物を着てもよく似合つた。社會のあらゆる階級の事情に精通し、無頼漢に假装する事も出来るし、貴族に假装する事も出来た。彼は正しい人だつたので、この任務を命ぜられた。彼は七人の射手に護衛され、國王ルイ十四世から修道院長に宛てた書簡をもつてリエージュへ出掛けた。その書簡は所罰のため犯罪者なる婦人を渡す事を要求した國王の勅書であつた。

侯爵夫人は修道院に隠れてゐたので、デグレーは暴力を以て彼女を逮捕する事が出来なかつた。それには二つの理由がある、第一は、彼女が前以て、追手の向つた事を探知し、院長しかその秘密を知らない修道院の密室に身を匿すかも知れないからである、第二は、リエージュは非常に宗教的市街であつて、この事件が市民に感動を與へ、その行爲が聖物冒瀆と認められ、市民が騒ぎを起してゐる間に、彼女が逃亡を企てるかも知れないからである。

そこで、デグレーは一策を案出した。彼は僧衣を纏めたならば疑惑を避けるに最も都合がいゝと考へた、で、彼は今羅馬か

ら歸つたばかりの佛蘭西の法師といふ扮装で、修道院の戸口に現はれ、美しい不幸な侯爵夫人に挨拶をしないではこのリエージュを通つて故國へ歸れないと誠しやかに述べ立てた、デグレーは大家の末子といふ様子であつた、彼は廷臣のやうにお世辭がうまいと同時に、銃士のやうに士膽であつた。

この最初の訪問に於て、彼は頓智と勇氣とをもつて相手を牽附けた。それは豫想以上の成功で、彼は又訪問する約束をして立去つた。デグレーはその翌日夫人を訪ねた。身分高く上流社會に育つた婦人は、もう一年以上さういふ社會の人々と交際を絶つてゐるので、デグレーに應對する時は巴里人のやうに振舞

つた。が、不幸にも美しい法師は二三日かにリエージュを去らねばならぬのだ。彼はそれがひどく悲しいやうな様子をした。そして翌日又訪問すると云つて立歸つた。翌日彼は約束の時間を違へずにやつて來た、侯爵夫人も待ちかねてゐた。二人の面會が僅かの間にかく二度にも三度にも途切れたのは、デグレーの計略であつた。それは彼が侯爵夫人と一層親密になるための計略であつた。デグレーは侯爵夫人の心が動いてゐるのを見て取り、市外の何處か寂しい所で逢つてくれと頼んだ。そこなら人に見附けられたり後を尾けられたりする怖がなく、心置きなく話が出来ると云つた。夫人の望む所だつたので、彼女は

直ぐに承諾した。その晩二人は逢引する事に相談を決めた。夕暮が來た、二人は同じやうに焦々して、しかし別々の望みを抱いて待つた。侯爵夫人は謀し合せた場所でデグレーを見附けた、デグレーは夫人に手を與へ、次ぎに彼女の手を握つて、相圖をした。と、射手がばらばらと現はれた。愛人は假面を脱いだ、デグレーは自分の身の上を語つた。侯爵夫人は彼の虜となつた。デグレーは彼女を部下の手に委ねて、修道院へと道を急いだ。その時始めてデグレーは修道院長に勅書を見せ、侯爵夫人の居間を開く許しを得た。彼は夫人の寢床の下から一個の函を發見し、それを押收し封印した。次ぎに彼は夫人の傍へ歸

つて出發を命じた。

侯爵夫人はデグレーの手に函があるのを見て仰天したが、直ぐ氣を取直し、函の中にある彼女の懺悔を書いた紙を要求した。デグレーはそれを拒絶した、と、彼が近づき来る馬車の方を振り向いてゐる隙を見て、夫人は留針を呑んで自殺を計つた。クロオド・ローラと呼ぶ射手の一人が、この有様を見て、彼女の口から留針を取つた。それ以來デグレーは、二倍の監視を命じた。

一一、函の中の恐ろしき懺悔

一同は晚餐のために立停つた。アントアース・バルビエルと稱

する射手が食事中彼女を監視した。ナイフ、フォークその他彼女が自殺を計り得るやうな器具は一切食卓の上へ置かなかつた。侯爵夫人はコップを口へ持つて行き、飲むふりをして齒でコップの縁を噛み取つた、が、射手は直ちにこれを發見し、硝子の破片を口から出させた。やがて彼女は射手に向つて、若し自分を救つてくれるなら莫大の財産を與へやうと約束した。射手は彼女を救ふためにはどうすればいゝかと訊いた。彼女はデグレーの喉を切つてくれと云つたが、彼はそれを拒絶し、他の事で彼女の利益になる事をしてやらうと云つた。そこで彼女はペンと紙を乞ふて、次ぎの如き手紙を認めた。

妾はデグレーの手中に陥り候、彼は妾をリエージュより
 巴里へ連れ行く途中に候。速かに來りて妾を御救ひ下され
 度候。

テリア様

アントアーヌ・バルビエルはその手紙を受取り、宛名の人に渡
 すと云つて、それをデグレーに渡した。翌日にこの手紙の効目
 がないのを見ると、彼女はテリアに再び手紙を書いて、護衛兵
 は僅かに八人である事、四五人の勇敢な攻撃者あらば打勝つ
 が容易なる事、彼女は彼が大膽に彼等を攻撃するを期待し居る
 事などを認めた。が、何の返事も音沙汰もないので、彼女は不

安を抱き、三本目の手紙を送つた。この手紙では、彼女は若し
 テリアが護衛隊を救ふ力がないならば、彼女を運んでゐる四頭
 の馬のうち二頭を殺し、混雜を利用して函を奪ひ、それを火中
 に投じてくれと懇願した。若しそれが成さるゝに非ざれば、彼
 女は破滅であると書いてゐる。これ等の手紙はみんなバルビエ
 ルによつてデグレーに渡されたのだが、テリアはそれを受取
 つてはゐなかつたのだが、しかし、テリアは自分の考へで、侯
 爵夫人が通過する筈のメストリツシエへ行つた。彼はそこで射
 手どもに賄賂を使はんとし、四千圓を出したが、彼等は收賄を
 肯じなかつた。

ルクロイで、一行は高等法院から囚人を出迎へに派遣された参事官パローに出遭つた、それは侯爵夫人が期待せざる時に訊問をなし、彼女に返答を準備させないためである。デグレーは事の顛末を語り、特に彼女が非常な不安を感じ、熱心に隠匿せんとしたかの函に就てパローの注意を促した。パローは函を開いた、中には他の物品の間に交つて『妾の懺悔』と標題を記せる一枚の紙があつた。この懺悔こそは、侯爵夫人の犯した多くの犯罪の有力な證據であつて、彼女は其の罪を人類と神の前に告白してゐるのであつた。既に讀者の知らるゝ如く。サント・クロアの懺悔は危く人に讀まるゝ所を幸ひにも火中に投せられた

が、侯爵夫人のそれはかく人手に渡つたのである。懺悔は七箇條より成り、『妾は神と父君に懺悔す』といふ冒頭をもつて始まつてゐる、それは彼女の犯した罪の完全な告白であつた。その内容は次の如きものである。

- 一、彼女は放火犯なる事を自白せり
- 二、彼女は七歳の時處女の操を汚せり
- 三、彼女は父を毒殺せり
- 四、彼女は二人の兄を毒殺せり
- 五、彼女はカルメット派修道院の尼なる姉を毒殺せんと企てたり

次ぎに二つの條項に於て、彼女は奇怪にして不自然なる罪を犯せし事々告白せり

問の模様は次ぎの記録に明かである。

問「お前は、何故リエージュに逃げたか。」

答「義理の姉に用事がありましたから、佛蘭西を去つたのです。」

問「お前は函の中にある書類を知つてゐるだらうな。」

答「函の中には家族の事に關する書類が五六通と、私の懺悔を記した紙が入つてゐます。けれども、私がそれを書いた時には、心が亂れてゐました。當時は外國にゐて、親戚には見棄てられ、一錢のお金をも借りなければならぬ状態でしたから、昂奮してゐて、何を云つたか何をしたか覚えてゐません。」

問「懺悔の第一條に就て訊くが、お前はどんな家を焼いたのか。」

答「私は家を焼いた覚えはありません。あれを書いた時は正氣ではなかつたのです。」

問「では、他の六つの箇條はどうだ。」

答「何も覚えて居りません。」

問「では、お前は父親や二人の兄を殺さなかつたのか。」

答「そんな事は少しも知りません。」

問「お前の二人の兄を毒殺したのはラシヨーゼではなかつたか。」

答「そんな事は少しも知りません。」

問「お前は毒害した姉が永くは生きてゐないといふ事を知つてゐただらう。」

答「死ぬだらうと思つてゐました。姉は兄と同じ病氣に苦しんでゐましたから、あの懺悔を書いた時は、私には少しも記憶力がなかつたのです。」

問「お前はサント・クロアがバステユを出てから、彼に會はなかつたか。」

答「會ひました。」

問「サント・クロアが、お前に父親を追拂つてしまへと勧めた事はなかつたか。」

答「覚えて居りません。」

問「サント・クロアがお前に、散薬や其他の薬品を與へはしなかつたか。」

答「覚えて居りません。」

八通の手紙を見せ、この手紙は誰に與へしものなるかと訊

問「問せるに、彼女は記憶せずと答へぬ。」

九二

問「お前は何故、サント・クロアに一萬二千圓を與へて約束をしたか。」

答「あの人に預けておいて、入用の時に使はうと思つたのです。そのお金がある事を債権者に知られたくなかつたら預けたのです。あの人の預證があつた筈ですが、旅行中に紛失しました。」

問「それ金を預けたのは二人の者が死んでからか、それとも死ぬ前か。」

答「よく覚えて居りません。」

問「お前はグラールゼルといふ藥劑師を知つてゐるか。」

答「炎症に罹つて三度程あの人に相談した事があります。」

問「お前は何故あの函を奪つてくれといふ手紙をテリアに送つたのか。」

答「自分にも分りません。」

問「お前は何故テリア宛ての手紙に、あの函を奪つてくれなければ自分は破滅だと書いたのか。」

答「そんな事は覚えてゐません。」

問「お前はペナウチエルと何か關係はなかつたか。」

答「ペナウチエルには一萬二千圓の貸金があります。」

九三

この記録を見るに、侯爵夫人は徹頭徹尾事實を否定して罪を逃れやうとしてゐる。

九四

一一、證言の數々

侯爵夫人は巴里に着くと、直ちにコンシエルゼリー監獄に監禁された。そこでも彼女は全部犯罪を否定した。所が、間もなく彼女は多くの證人の證言によつて、一層窮境に陥つた。軍曹クリューエの證言——證人は參事官ドオブレー氏の從僕が、嘗つてサント・クロアの從僕であつたラシヨールゼなるを知り侯爵夫人に向つて、若し參事官がラシヨールゼの過去を知つた場

合には嫌悪を感じずるだらうと云ふと、夫人は『そんな事を兄さんに云つてはいけない、きつとお前をお打ちになるよ』と叫んだ。故に彼は、ラシヨールゼが毎日サント・クロアや侯爵夫人の所へ行くのを見たが、ドオブレー氏にはその事を語らなかつた。侯爵夫人は彼女の函をサント・クロアから受取りたいものだと思つて心配してゐた。彼女の書類が手に入るなら二三千の金は使つてもいと云つてゐた。彼女はサント・クロアを殺したかも知れないのであつた。彼女は誰か函の中に入つてゐる物を見はしないかと始終不安に驅られてゐた。それは極めて重大な事柄だが、自分にしか關係のない事だと云つてゐた。サント・

九五

クロアの居室で函が開かれた後に、證人は侯爵夫人に向ひ、代理人ピカールがラショーゼに函の中には不思議な物が入つてゐたと告げた由を語つた。所が、夫人は顔を赤らめて、話題を換へた。證人は彼女も共謀者ではなかつたかと訊いた。彼女は『何！ 私が？』と云つた。そして『ラショーゼはピカルデイーへ追ひやつてしまはなければならぬ。』と獨言を言つた。彼女は永い間サント・クロアに彼女の函を渡してくれと云つて懇願してゐた。若し彼女が彼から函を渡取つたならば、彼女はサント・クロアを殺したかも知れない。證人はブリアンクールにラショーゼが捕縛されたから、屹度萬事を自白するだらうと語つたが、

その時ブリアンクールは侯爵夫人の事を指して、あの女は破滅だ。と云つた。ドオブレの娘がブリアンクールを悪者だと云つた。すると、ブリアンクールは彼女がどれ程彼のお蔭を蒙つてゐるのか知らないのだ。奴等は彼女も副典獄の未亡人も毒殺しやうとしてゐるのだが、彼がやつとそれを妨げてゐるのだと答へた。證人はブリアンクールから侯爵夫人が屢々嫌ひな人から免れる方法があるといふ事を云つた由を聞いた。

少女エドム・ヒューエ（ブレスチアの女の證言——サント・クロアは毎日侯爵夫人に會ひに行つた。夫人に屬する函の中に、彼女は粉末と泥膏用の昇華物を入れた二つの小さな紙包がある

のを見た。證人は藥劑師の娘であるからそれを認める事が出来た。或る日ブランヴェリエル夫人は愉快げに彼女に小さな函を示し、『ここには敵に仇を報ずる道具が入つてゐる、この函は小さいが、うんと成功をさせてくれるのよ！』と云つた。が、夫人は忽ち非常に驚いて、『まア、私は何と云つたのだらう？ 誰れにも云つちやいけなよ。』と叫んだ。宮廷の書記官ラムベールが夫人の所へサント・クロアの使で紙包を持つて來たと證人に語つた事がある。ラシヨールは屢々夫人に逢ひに來た。證人自身も夫人に貸した百圓の金を夫人が返してくれないので、サント・クロアの所へその不平を訴へに行つて、若し返してくれな

いなら、自分の見た事を副典獄に告げると云つた。そこで百圓を返してくれた。サント・クロアと侯爵夫人はいつも毒藥を身に附けてゐたが、それは萬一捕縛される場合にはそれを使ふつもりであつた。

グラージェルと一緒に住んでゐたロオテン・ペレットの證言——彼は屢々サント・クロアと一緒に主人を訪ねた夫人を見た。從僕がその婦人はブランヴェリエル夫人だと云つた。自分は自分の首にかけて誓ふが、彼等がグラージェル家へ來たのは毒藥を作るためである。彼等が來る時は、サン・ゼルマンの市場の所で馬車を乗り棄てるのが常であつた。

ブレイ氏の死後、ラシヨーゼが夫人に會ひに来て、密談した、ブリアンクールは、夫人は貴い人々を殺したのだと語つた、ブリアンクールは毒薬を恐れて、毎日練薬を飲んでゐた。彼がまだ生存らへてゐるのはこの用心のためであつたに違ひない、又彼は夫人から毒殺の秘密を打明けられたので、刀で刺されはしないかと怖れてゐた。ドオブレイ氏の娘も用心の必要があつた。ブランヴィリエル夫人の子供たちの家庭教師に對しても同じ計畫が企まれてゐた。参事官が死んでから二日目に、ラシヨーゼが夫人の寢室に居る時、故副典獄の秘書官クーステが來たといふ

知らせがあつたので、ラシヨーゼは寢床の傍の凹間に隠れた。ラシヨーゼはサント・クロアの手紙を夫人の所へ持つて來たのである。

次に警部フランソア・デ・グレー、射手ラヴィオレット、射手アントアーヌ・バルビエル等の證言が書き連らねてゐるが、前の叙述と重複するから省略する事とする。最後に侯爵夫人の腰元フランソア・ルツセルの證言が記されてゐる。彼女は夫人が毒薬を試験したかの女中である。

フランソア・ルツセルの證言——夫人は彼女に砂糖漬の毒を與へた。彼女はナイフの先で五つ六つそれを喰べると、直ぐ病

1011
氣になつた。夫人は又彼女に少し濡れた羊の肉片を與へた。彼女はそれを喰べると激しい腹痛を覚え、胸を刺されるやうな痛みを感じ、三年間同じ容態で苦しんだが、彼女は夫人のために毒害されたと信じてゐる。

一三、メートル・ニヴルの辯護

かくの如く多くの有力な證言の矢表に立つて、絶對にそれを否定しつゞけるのは困難であつた。が、それにも拘らず、夫人はやはり自分の無辜を主張した。當時の最も名高い辯護士の一人なるメートル・ニヴルは依頼を受けて彼女の辯護の任に當つ

た。かくも多くの有力な證據を有する夫人の犯罪を當時の法律家は如何に辯護したか、讀者は深き興味をもつてその辯論の内容を知らむと欲するであらう。

メートル・ニヴルは極めて聰明なる理論をもつて告發の各理由を一々辯駁し、夫人がかゝる嫌疑を抱かるゝは、夫人がサント・クロアと情交があつたからであると説明をしてゐる。そして夫人はドオペレー父子毒殺には無關係であると説き、それを全然サント・クロアの抱きし復讐心に歸してゐる。最も有力なる證據の懺悔書に關しては、彼はブランヴェイリエル夫人にとつて不利なる唯一の證據なる事を認めてゐる。しかし彼は嫌疑者

が提供した彼等に不利なる證言が訴訟法上の理由によつて承認されなかつた同様の實例を擧げて右の證據の効力を駁撃してゐる。彼は三つの實例を擧げてゐるがこの實例は實例そのものが非常に興味深いから、記録のまゝを左に掲げやう。

第一例

宗規専門法師、神學者、シャルル五世の懺悔聽問僧として有名なるドミニクス・ソトーは、法王ポール三世の下に開かれたトレントの第一回宗教會議に出席して、自ら自己の罪惡を認め文書を紛失した人に關する問題を提出してゐる。この紛失した文書は宗教裁判所判事の手に渡り、判事はこの文書

を證據として筆者を告發したのである。この判事は、懺悔は神聖であつて、永久の秘密裡に葬るべきものであるとの理由で、上官から罰せられた。この先例に倣つて、次ぎの如き裁判(懺悔聽問僧規約)中に掲載する)がロデリック・アキュニオIによつて記述されてゐる。バルセロナ生れの一カタロニア人が殺人罪によつて死刑の宣告を受け、その罪を自白したが愈々處刑の時が來ると、彼は懺悔を拒んだ、如何に強ひられても、彼はそれを峻拒した。で、人々は死の恐怖のために彼の心が攪亂されてゐるのだと想像した。ウァレンチアの監督トーマス上人がこの噂を耳にした。ウァレンチアは罪人の處

刑を受けた土地である。高僧トーマス上人は慈悲深い人で、罪人が肉體と同時に靈魂までも失はぬやう、彼に懺悔をさせやうと骨折つた。所が、上人は罪人の峻拒の理由を聞いて驚いた。罪人の云ふ所によると、彼は懺悔聽問僧を憎んでゐるのだ。彼は世話になつてゐる僧侶の裏切によつて罪を宣告されたのであつた。彼の犯罪を知つてゐるのは、その僧侶唯一人であつたといふのだ。彼はその僧侶に罪を懺悔し、死體の埋没されてゐる場所を打明けた。所がその懺悔聽問僧は彼の懺悔を公表したので、忽ち彼は告發されたのである。彼は懺悔をする時には知らなかつた事をその時漸く知つた。かの懺悔

聽問僧は彼の殺した男の兄弟で、復讐心が起つたために彼を裏切つて懺悔を公表したといふのである。トーマス上人はこれを聞いて、この出来事は一人の人間の生命に關係のある裁判よりも更に重大な問題である。これは宗教の名譽に關する大問題であると考へた。上人は罪人の陳述を確める必要があるかと考へて、かの懺悔聽問僧を召喚した。懺悔聽問僧が背信の行爲を承認したので、判事たちは己むなく彼等の判決を取消し、罪人を放免したが、この行爲は公衆の喜ぶ所となつた。かの懺悔聽問僧は重き刑罰に處せられた。しかしトーマス上人は、彼が自己の過失を直ぐに告白したといふ理由で、且つ

彼が判事その人でも懺悔聽問の際には敬虔の念の必要なる事を公衆に知らず機会を與へたといふ理由で、彼の處罰を輕減した。

第二例

千五百七十九年にツウルースの宿屋の主人が、家人に知れないやうに自分の家へ泊つた客人を殺し、死骸を穴倉へ埋めた。やがて主人は悔恨の情に堪えずして、この罪を懺悔聽問僧に懺悔し、死骸を埋めた場所を打明けた。死者の家族は百方手を盡して死者の行衛を探したが杳としてその消息が知れないので、ツウルースの町民に若し當人がどうなつたかを知

らせてくれる者には莫大の謝禮を與へるといふ事を廣告した。かの懺悔聽問僧はこの金に目がくれて、本人が殺されて宿屋の穴倉に埋められてゐる事を密告した。宿屋の主人は獄に投ぜられ、拷問されて、罪を自白した。然るに、後に至つて、主人は懺悔聽問僧が自分を裏切つて罪を公表させたのである事を主張した。そこで宗教裁判所はかくの如き事實摘發の方法を非なりとし、懺悔聽問僧の陳述の他に有力な證據を擧げ得なかつたので、無罪の宣告を下した。懺悔聽問僧は絞罪に處せられ、その死骸は火葬に附せられた。かくの如く宗教裁判所は懺悔の神聖を重大視してゐる。

或る土耳其の青年紳士がアルメニアの一婦人に對して激しい愛情を傾けてゐたが、彼女が愼み深いために若者はその情慾を充す事が出来なかつた。若者は遂に情火に堪え得ずして若し彼女が尙も拒絶するならば彼女と彼女の夫とを殺すと脅迫した。婦人は若者がきつとこの脅迫を實行する事を知つてゐたので、怖れをなし、佯つて同意を約した。そして時間を定めて彼女の家でその土耳其人と逢引をした。が、彼女は豫め夫と謀し合してあつたのだ。土耳其人は劍と拳銃を持つてゐたが、夫婦は協力してその敵を殺し、死骸を秘かに床の下

へ埋めた。その後數日を経て、夫婦はアルメニア僧を訪ね、一仔一什を告白した。所が、この僧侶は不埒な男で、僧侶の法律や懺悔聽問僧の職能が限定せられてゐない回教國では、彼の與ふる證據は他の告發者のそれと同じ價値があるものと思つた。そこで彼はそれによつて利益を得、自己の貪慾を充さんと決心した。彼は數度夫婦を訪問して彼等を脅迫し、尙も金を借りた。が、夫婦はその財産の全部を失つて、遂に僧侶の要求を拒絶せねばならぬ状態に立至つた。僧侶は尙も報酬を得る目的をもつて、死者の父にこの事を密告した。息子を愛してゐた父親は土耳其の大臣を訪問して、息子を殺

た犯人の名が懺悔聽問僧の口から漏れた事を告げて、裁判を求めた。所が、この告發は好結果を齎らさなかつた。大臣は却つてアルメニア人に同情を寄せ、彼等を裏切つた僧侶を非難した。彼はアルメニアの僧正を召喚し、懺悔とはどういふものであるか、それを裏切つた僧侶はに如何なる刑罰を課すべきか、かゝる方法によつてその罪過を公表された人々は如何になすべきかを質問した。僧正は懺悔の秘密は絶対に守らるべきものである事、基督教徒は懺悔の秘密を公表した僧侶を火刑に處し、彼が告發した罪人の放免する事を答へた。大臣はこの答によつて満足し、かの僧侶を火刑に處し、アルメ

ニア人の夫婦に無罪を宣告した。

一四、ピロー博士の監房訪問

辯護士ニヴェルが三つの例證を擧げて被告の無罪を主張したが、裁判官等はこれを棄却し、犯罪の證據が充分であると認め、で、裁判の成行に注意してゐる者は、何人もブランヴィリエル侯爵夫人は有罪の判決を與へられるだらうと確く信じてゐた。

宣告が言ひ渡される前に、即ち千六百七十六年七月十六日の朝、裁判長の依頼によつて、ソルボンヌ宗教大學の神學博士ピ

ロー氏が侯爵夫人の監房を訪ねた。裁判長はかゝる大罪人を最
 後までそのまゝで置くのは宜しくないと考え、高僧を迎へた
 のである。ピロー博士はコンシエルゼリー監獄には教誡師が二
 人もゐるのだし、この任務を果すには自分はあまりに弱いと云
 つて辭退したが、他に適當な人がないといふので、この苦しい
 任務を引受けた。裁判長はこの場合絶対に信用が置ける人を選
 ぶ必要があるといふ理由の下にむりやりに博士に依頼したので
 ある。事實、裁判長は多くの罪人を取扱つたが、侯爵夫人のや
 うに強情な罪人を見るのは稀だと驚いてゐた。

ピロー博士を迎へる前日、裁判長は朝から晩まで訊問所で訊

問を續けた。被告は十三時間の間彼女にとつて最も不利な證言
 をした證人ブリアンクルと對決させられた。その日は猶更に
 引續き五時間取調べられたのだが、彼女は長時間の取調べによ
 く耐えた。彼女は傲然たる態度で證人に對ひ、彼は酒飲みの卑
 しい従僕で、不行跡のために解備されたのだから、彼の證言は
 あてにならぬと主張した。そこで裁判長は彼女の頑強な精神を
 挫く望みがないのを見て僧侶の助をかりる決心をした。まだ彼
 女を死刑に宣告するには充分でない、さうするとこの毒殺事件
 は曖昧の中に葬られ、社會に害毒を流す事になると裁判長は考
 へたのである。

「一六」
ピロー博士は侯爵夫人の姉の手紙を持つて彼女の監房へ入つて来た。この姉は前述の如くカルメリット派のサン・ジャック修道院にゐる尼である。姉は感動と愛に充ちた言葉で、妹がこの高僧を信じ、補助者としてではなく、友人として接するやうに懇願した手紙を妹に書いたのである。

ピロー博士が入つて来た時には、侯爵夫人は法廷の罪人席から歸つたばかりのところであつた。その日彼女はそこで三時間取調べられたのだが、例によつて何にも自白しなかつた。裁判長は裁判官としての役目を済ました後で、一人の基督教徒として彼女の現在の概はしき地位が何であるかを示し、彼女は間も

なく神の前に出るべき運命をもつてゐるので、今や人間の前に現はれるのはこれが最後であると説いた。そして裁判長は終に自ら跪き、感動に充ちた言葉で彼女に罪を懺悔するやうに涙をもつて警告したので、並み居る裁判官中の最も年を老つた最も冷酷な男でさへ泣いたほどであつた。が、侯爵夫人は裁判長の言葉に動かされたやうには見えなかつた。侯爵夫人はピロー博士を見ると、いよく死刑の宣告を受けたのではないかと疑つて、博士に近づいて、かう云つた――

『あなたがゐらしたのは、あのウ――』
が、ピロー博士と一緒に入つて来た教誡師シャヴィンニー教

父は彼女を遮つて云つた。

『奥さん、まづお祈禱を始めませう。』

一同はいづれも跪いて神に祈禱をさづけ、次ぎに侯爵夫人は聖母にも祈禱をさづけ、次ぎに侯爵夫人の祈禱が済むと、彼女は博士に近づいて、改めてかう云つた。『きつと裁判長が私に慰めを與へるやうにあなたを遣したのでせう、私は残る短かな生涯をあなたと一緒に過さなくちやならないのです。私は長い間あなたにお目にかゝりたいと待つて居りました。』

『奥さん、』と博士は答へた、『私は靈的な役目を果すためにあな

たの所へ参りました、たゞ私はこれが他の場合であつたらどんなにいいかと思ひます。』

『私どもは決斷力が必要です、』と彼女は微笑みながら云つた、

『どんな事にでも。』

次ぎに彼女はシャヴィンニー神父に向つて云つた――

『教父様、博士を連れて来て下さつた事をお禮を申し上げます、それからあなたが今迄度々私を訪ねて下さつた事もお禮を申し上げます、どうか、私のために神様に祈つて下さい、これから私は博士の他には誰とも話をいたしません。私は差向ひでなければお話の出来ない事柄に就て博士とお話する積りです。』

では、左様なら、教父様、あなたが今迄私のために心から氣を附けて下さつた事に對し神様はきつとあなたに報ゐて下さることゝ存じます。』

この言葉を聞くと、教父は退出した。侯爵夫人は博士や常に彼女の監視してゐる男の看守二人、女の附添人一人と共に後に残つた。夫人の監房はモントゴアリー塔にあつて、塔の巾一杯の廣さを有する大きな監房であつた。監房の一端には灰色のカーテンを下げた夫人のために寢床と、附添女の寢るたゞみ寢床があつた。それは嘗つて詩人タオフィールが監禁された監房でその戸口に近い壁には、彼が自ら書きつけた詩が今も残つて

あると云はれてゐた。

一五、侯爵夫人の改悛

二人の男看守と附添女は何のために博士が入つて來たかを察して、夫人が自由にこの高僧に自分の願ひを打明け、この高僧から慰めの言葉を聞かれるやうにと監房の一端へ退いた。そこで、二人は卓子に向ひ合つて坐つた。夫人は既に宣告が下つたものと考へ、その假定の下に話を始めたが、博士は宣告はまだ下らないので、自分は何時それが下るかはずきり知らないし、それがどんな宣告であるかに就ては尙のこと知らないと言つ

た。が、その言葉を聞くと夫人は博士の言葉を遮つた。

『私は未来の事をそんなに氣にかけては居りません。たとへ宣告がまだ下らないにしても、それは間もなく下るでせう。今朝私は新しい報告を待受けてゐたのです。私はそれが死の報知だといふ事を知つてゐました。たゞ私は裁判長のお情にすがつて、宣告と刑の執行との間の時間を延ばして頂かうと思つてゐました。今日死刑を執行されたら、私は準備をする時間がな

いんです、私はもつと時間が要るやうに思ひます。』
博士は夫人からさういふ言葉を聞かうとは思はなかつたので彼女の感じた事を知つて非常に喜んだ博士はシャヴィンニー教

父からかういふ事を聞いてゐた、前の日曜日にシャヴィンニー教父が、彼女は到底死刑を免れられさうもないといふ事や、人の噂ではそれはもうすつと前から決つてゐる事實だといふ事を彼女に話した。すると、彼女は最初は呆氣にとられたやうだつたが、次ぎに非常に恐怖に捕へられてゐるやうな様子で、『教父様、私は死ななくちやならないのですか？』と云つた。で、教父が慰めの言葉を與へやうとすると、彼女は立上つて、頭を振つて、傲然としてかう答へた――

『いえ、いえ、教父様、私を勵まして下さらなくともようござんす、私は自分獨りでします。直ぐにでも、私は氣丈な女とし

て死ぬにはどうするか知つてゐます。』

そこで教父は人間といふものはさう速かに容易く死の準備が出来るものではないので、懲憑として死に就くには永い間の準備が必要であると彼女に語つた、と、彼女は自分は懺悔をするには三十分しか要しないし、死ぬにはたゞの一分間で死ぬると答へたといふ事であつた。

で、博士は日曜日と木曜日の間に、彼女の感情が非常に變つたのを見て喜んだ。

『自分を振り返つて考へて見れば見るほど、神様のお裁きを受ける準備をするには、人間の裁判を受けた後で神様のお裁きを受

ける準備をするには、人間の裁判を受けた後で神様のお裁きを受ける準備をするには、一日でも充分でないと感じます。』と彼女は云つた。

『奥さん、』と博士は答へた。『私はあなたの宣告が何であつて何時下るかを知りません。が、若し死刑であつて今日それが執行されるならば、明日までそれを延ばさせる事をあなたにお約束してもよろこびます。死刑であるとはまだ決つてはゐませんが、あなたはどんな事に對してもよく準備をされてゐる必要があるやうに私は感じます。』

『いえ、死刑は確實です。』と彼女は云つた。『私は無益な希望を

抱いてはならないのです。私はあなたに私の生涯の大秘密をお打明けしなくちやなりませんですが、教父様、私がそれを打明ける前に、あなたの私に對する御意見を聞かして頂きたう存じます。私はこの場合どうしなければならぬとお考へですか、それを聞かして頂きたう存じます。

『あなたは私の考を知つてゐなさるのだ、』と博士は云つた。

『あなたは私が何を云はうとしてゐるか見越してゐなさるのだ。あなたの良心の秘密に入る前に神様とあなたの私事に就て相談する前に、私はあなたに或る定まつた法則を示さうとしてゐます。私はまだあなたに罪があるかどうかを知りません。あ

なたが告發された犯罪に對する私の裁判は延ばしませう、それに就てはあなたの懺悔を聞かなければ何にも分らないんですからね。で、私にはあなたの罪を疑ふべき義務があるのです。私はあなたが何故告發されてゐなさるかを知つてゐます。それは一般に知れ渡つてゐる事ですから、私の耳にも聞えたのです。あなたも想像なすつてゐるでせうが、あなたの事件は喧傳されて、それを知らない者が無い位です。』

『さうです、』と彼女は微笑みながら云つた。大評判で、私かみんなどの口の端に上つてゐる事を私は知つてゐます。』

『そこで、』と博士は云つた。『あなたが告發されてゐなさるの

毒殺罪です。若し一般に信ぜられてゐるやうにあなたに罪があるのなら、あなたが裁判官等の前で毒殺は何であるか、その成分が何であるか、その解毒薬は何であるが、共謀者は誰々であるかを自白なさらないければ、神様があなたを容して下さると思つてはいけません。奥さん、吾々はそれ等の悪人を一人残らず捕へねばなりません。何故といふに、若しあなたが彼等を見逃すならば、彼等はあなたの毒薬を用ひるのです。すると、あなたは死後までも彼等の犯すあらゆる殺人罪の責任を引受けなければなりません。あなたが生きて居られるうちに彼等を裁判官の手に引渡さなかつたのですからね、だから、その場合あなた

はまだ生存らへてゐるのです。あなたの犯罪があなたを生存らへさせるのです。奥さん、御存知のやうに罪といふものは死の瞬間に容されはしません。で、あなたに若し罪がありとして、その罪の赦免を得るためには、あなたの死ぬる時、その罪も死んでしまはなければなりません。あなたが罪を犯さなかつたら、罪があなたを殺すのですからね。』

『え、さうです』と侯爵夫人は一寸黙つて考へ込んだ後で答へた。『私に罪があるといふ事は承認しませんが、萬一罪があるとしたら、あなたのお言葉をきつと守りませう。ですが、ここに一つお尋ねしたい事がございます、どうか答へて下さいませ。』

この世にはどうしても許されない罪がないかどうかといふ事です。非常に恐ろしい罪を澤山犯したために、教會でもそれを宥せないし、神様がお裁きになる場合にも、どんなに恵みを垂れてやらうとお思ひになつても宥せないといふやうな人はゐないものでせうか？ 私がこんな事を始めにお尋ねするのは、どうせ希望がないものなら懺悔したつて無駄だと思ふからです。』博士はこの言葉を聞いて、心の中にやゝ恐怖を感じながら答へた。

『奥さん、あなたのその最初の御質問は、この問題以外に置かざるべきものに過ぎないのであつて、あなたの現在の状態とは何

の關係もないのだと私は考へたいのです。私は一般的にその御質問に答へませう。奥さん、この世にはどんなに怖るべき多くの罪を犯したつても、容せないといふ罪人はありません。これは信仰の一つの箇條で、それをお信じにならなければ、あなたは善良な加特力教徒として死ぬ事は出来ません。事實、或る學者たちは今までにこれと反對の説を唱へましたが、彼等は異教徒として非難されました。容す事が出来ないのは失望と悔改めをしない罪です。それは吾々の生涯の罪であるばかりではなく、吾々の死後の罪です。』

『神様はあなたのお言葉によつて私に信仰を與へて下さいまし

た、私は神様がすべての罪を容して下さる事を——神様が度々その力をお顯はしになつた事と信じます。たゞ私の心苦しく思ふ事は、私のやうな悪い人間に、今迄神様が與へて下さつた愛に値せざる私のやうな人間に、神様は尙もとの御好意を示して下さるかどうかといふ事です。』

博士は言葉を盡してその確實である事を説いた。そして話してゐる間に博士は注意深く夫人の性格を知らうと努めた。博士は云つてゐる。彼女は生れながら勇氣のある、大膽な婦人である。生れつきは温順で、善良な、容易には昂奮しない、聰明で洞察力のある、事物を明確に理解する婦人である、彼女は僅か

な注意深い言葉で自分の心持を巧みに言ひ現はした。困難に處して易々と自分の行く道を發見し、窮境に陥つても自分の方針を選び得る婦人である。氣軽るな、浮氣な婦人である、従つて落着きがなく同じ事を五六度繰返へしても平氣であるといふ風であつた。それがために私は時々自分の言はねばならぬ事を變へずにはゐられなかつた。一つの問題に就て一寸話すと、直ぐに問題を變へなければならなかつた。そして後になつて又前の問題に歸り、その問題に新たな衣を着せて話をしなければならなかつた。彼女は言葉尠なくはあつたが、巧みに話した。その言葉には學問を銜つたりする所がなかつた。自分の云はうとす

る事を的確に云ひ現はした。彼女の顔を見、彼女と話をしていると、誰でも彼女があんな親殺しをする程の悪人であらうとは思へなかつた。従つて、兎に角あんな優れた精神を持つてゐる人が困難な不意の出来事に遭遇しても大膽に自分を表白し、斷乎たる決心をもつて死を待ち、それに耐へられる優れた精神をもつてゐる人が、あんな大罪を犯した罪人であらうとは實に驚嘆すべきである。そして人類を人類それ自身の手を委ねてゐる神の審判の前に頭が下るのである。彼女の顔にはそんな兇惡を示めす特徴は何一つなかつた。胡栗色の髪は房々として、形のよく整つた丸顔で、青い眼は非常に美しくて柔和であつた。皮膚

の色は極く白く、鼻も立派で不愉快なところは少しもなかつた。しかし、彼女の顔には特に目立つて人を魅惑するやうな人はなかつた。もうちりめん皺がよつて、年よりは老けて見えた。最初會見した時、どうかして私は彼女の年を訊いた。『サント・マダレーヌ祭日まで生きてゐると、私はまる四十六になるんですの。』と彼女は言つた。『サント・マダレーヌの日に生れたので、私も同じ名なんです。私はマリー・マダレーヌと命名されました。でも、私はもう長い事生きてはゐられないんです。私は今日は死ななければなりません。遅くとも明日は死ななければなりません。だから私に一日與へて下さる事はお情けです。』

わ。あなたのお言葉に絶つてそのお情けを受けたいと思ひます。』誰も彼女は四十八には充分なつてゐるだらうと考へるに違ひない。彼女の顔はいつも柔和であつたが、不仕合せな考が彼女の心に浮ぶと彼女は顔をしかめる。その時の表情が一寸見ると人に恐怖の感じを與へた。私は時々憤怒や、嘲罵や、悪意のために彼女の顔がねぢれるのを見た。言ふのを忘れたが、彼女は小柄で痩せてゐた。大略ではあるが、これが直ぐに私の眼についた彼女の肉體と精神の叙述である。』

一六、懺悔聽問

侯爵夫人は彼女の懺悔聽問僧ピロー博士に自分の生涯の歴史の初めの方を懺悔しかけたが、彼女は博士がまだ聖餐式を行はなかつた事を思ひ出し、コンシエルゼリー監獄の禮拜堂を指さして、それを爲すべき時である事を博士に注意した。彼女は彼女のために又彼女が神の御座に於て聖母の執成を得るやうに聖母のために、聖餐式をさへげてくれと頼んだ。彼女はいつも聖母が自分の守護神であると考へてゐた。そして罪惡を犯してゐる最中でも、この特異な信心を忘れなかつた。彼女は博士と一緒に行く事は出來ないから、尠くとも心の中で彼と一緒に行動すると云つた。博士は午前の十時半に彼女の傍を立去つた。四時

間の間差向ひで話した結果、彼女は博士の敬神な念と温情とに導かれて、判官等の脅迫や拷問の恐怖に遭つても自白しなかつた懺悔を博士の前でする決心をした。敬虔の念の厚い高僧は聖餐式を行ひ、懺悔聽問僧と懺悔者とのために神の助けを祈つた。聖餐式後、彼は監房へ歸る途中、番人部屋で、セニーと云ふ書記から、宣告が下され、ブランドヴェイリエル夫人は斬手の刑に處せられたといふ噂と聞いた。この苛刑は——事實、その宣告は刑を軽減したものであつたが——博士をしてその懺悔者に一層の興味を感じさせた。で、彼は急いで彼女の所へ歸つて行つた。

戸が開かれたのを見ると、彼女は靜かに博士の方へ進んで、博士が本當に自分のために祈つてくれたかどうかと訊いた。そして彼が確かに祈つたと言ふと、彼女は『教父様、私は死ぬ前に臨就聖餐式を受けられるでせうか?』と訊いた。

『奥さん、』と博士が答へた。死刑の宣告を受けたらあなたは聖餐式を受けずに死に就かねばなりません。その事に就てあなたに希望を抱かせたら、私はあなたを欺く事になるでせうのサン・ポールの警部は言葉を盡して哀願したけれども、その恩恵を受けずに死に就いたといふ事を聞いて居ります。彼はノートル・ダム寺院の見える所で處刑されました。彼は自分で祈りました。

あなたも彼と同じ運命になつたら御自分でお祈りなさい。が、それより仕方がないのです。神様はそれで充分だと見做して居られるのです。』

『でも、』と侯爵夫人は言つた。『シルク・マールさんやツウさん（譯者註、この二人は何れもルイ十三世期の廷臣で、宰相リシエリユーに對する陰謀發覺して死刑に處せられた）は、死に就く前に聖餐式をお受けになつたぢやありませんか？』

『私はさうは思ひませんが、奥さん。』と博士は云つた。『モントルゾルの著書やその他二人の處刑を書いた書物にはさうは出てゐませんからね。』

『でも、モントモレンシー公（譯者註、やはりルイ十三世の臣にして、オルレアン公の叛逆に與みせし罪により斬罪に處せらる）は？』と彼女が云つた。

『しかし、マリラックはどうですか？』と博士が答へた。

事實、モントモレンシー公には恩典があつたが、マリラックは恩典に浴しなかつたのである。侯爵夫人はそこで非常に打たれた。何となればマリラックは彼女の家とは親戚であつて、彼女は日頃その關係を誇りとしてゐたからである。

『それに、』と博士は續けて云つた。『同じやうな例をお思ひ出しになつて、それにあやからうとしてはいけません。それ等の例

は特別の場合です。一般の法則ではないのです。あなたは特別の恩典を期待してはなりません。あなたの場合には一般の法律が適用されるのです。あなたの運命は他の犯罪人の運命と少しも違ひはないのです。若しあなたがシャルル六世陛下の治世より以前に刑を受けられたとしたら、どうでせう？ シャルル六世陛下の治世より以前には、罪人は懺悔もせずに死刑に處せられたのです。この苛酷に對して恩典があつたのは勅命が下つた場合だけです。それに聖餐式は靈魂の救ひには絶對に必要ではないのです。人は神の言葉を讀んで靈的に神と融合する事が出来るのです。若しあなたが心からあなたの犯罪を憎み、あなた

の全靈をもつて神を愛するならば、あなたが信仰と慈悲をもつならばあなたの死は殉教者の死であつて、新らしい洗禮です。』
 『あゝ、神様。』と侯爵夫人は云つた。『あなたのお言葉によつて死刑執行人の手が私の靈魂の救ひには必要である事が分りました。若し私があの時ソエージュで死んだら私はどうなつたでせう？ 今頃私はどうなつてゐるでせう？ 私が捕縛を免れて、更に二十年外國で生き延びたとしたら、私の死後はどうなつたでせう、私が罪から潔められるにはどうしても斷頭臺が必要であるとするれば、今私は自分の悪行みんなが分りました、殊に最後の悪行——裁判官の前で横着だつた事です——中で

も一番悪い行だつた事が分りました。ですが、まだすべてが失はれたわけではないのです。神様に感謝いたします。まだ私は最後の訊問を受けねばなりませんから、その時私が生涯の罪を残らず懺悔いたします。どうかあなたから裁判長に私を容して下さるやうお願いして下さい、昨日私が罪人席にゐる時、裁判長は私のために非常に感動に充ちた言葉を述べて下さいました。私は深く感動しました。けれども、白状しないであらば、證據が私の罪を定めるには不充分だから罪を免れるだらうと思つて、そんな様子を見せまいとしました。今自分の過失が分りましたから、私はそれを償ひます。今日裁判長が下しな

る私に不利な宣告に對しても私は腹を立てません。その宣告を主張する迫害者に對しても不平を云ひません。私は身をへり下つてそのお二人に感謝いたします。その宣告によつて私の魂は救はれるのですから。』

博士がそれに答へて、彼女を勵まさうとすると戸が開いた。中食が運ばれたのである。もう一時半であつた。侯爵夫人は言葉をやめて、恰も田舎の邸で女主人の役を勤めてゐるとでもいふやうに、運んで来たものを見た。彼女は自分を監視してゐる婦人と二人の男を卓子に向つて掛けさせ、博士の方を向て云つた。『この人たちはいつも私の相手をして私と一緒に御飯を頂い

てくれるのです。で、失禮ですが、もしお宜しかつたら、今日もいつもと同じやうにしたいと存じます。』そして彼等の方を向いて云つた。『これはあなたがたと一緒に頂く最後の御飯です。』次ぎに彼女は附添女の方を向いて云つた。『ルスさん、長い間お世話になりましたが、もう少し我慢をして下さい。間もなくあなたは御自由になるでせう。明日はあなたはドラヴェーへ行きます。今から七時間か八時間したら、もう私の用をして頂かなくともいゝ事になるでせう。私はこのお方の手に委ねられるでせう。あなたは私の傍にある事を許されないでせう。さうなれば、あなたは御自由に何處へでも行けるのです。あなたは私の

處刑されるのを見るには耐へられないだらうと思ひます。』彼女は極めて穩かに、少しも高ぶらずにかう云つた。時々附添の者は何れも涙を隠くさうとしたが、彼等は彼等が不便だといふ様子をした。食物が卓子の上に載つてゐるのに誰も喰べやうとしないのを見て、彼女は博士にスープを勧め、それが普通のスープで召上れないだらうが許してくれと云つた。彼女は自分もスープを少し飲み、鶏卵を二つ喰べた。そして自分の傍にナイフもフォークもないのを指示して、みんなに給仕が出来ないのを許してくれと云つた。

食事の半ばで、彼女は博士の健康を祝して盃を擧げたいと云

つた。博士はそれに答へて彼女の健康を祝して盃の葡萄酒を飲んだが、彼女は博士の謙讓なのを見てひどく感心したやうに見えた。明日は断食日です。』と彼女は云つて盃を下へ置いた。『明日は拷問と刑の執行を受けなければならぬ日ですが、私は教會の規則に従つて断食を守つてもりです。』奥さん、元氣をお附けになるために、スープでも召上りたかつたら、御遠慮なく召上る方がようござります。それは我儘ではなくて、必要なのです。教會はさういふ場合には断食は強いはしません。』と博士は云つた。

『それが必要だとすれば、あなたがさうおつしやつて下さるの

なら、私はそんな事を氣に掛けますまいけれども、私はその必要がないだらうと思ひます。今晚夕食の時スープを頂いたら、そして夜中にいつもより濃いのをもう少し頂いたら、明日までずつと何ともないだらうと思ひます。それから拷問の後で新しい卵を二つ頂きませう。』

一七、懺悔

ピロー博士はこの時の事を次ぎのやうに述べてゐる、『全く、彼女の落着いた態度には驚いた。彼女が附添人にいつもより濃いスープを作つてくれるやう夜中に二杯それを飲ましてくれる

やう頼んでゐるのを聞いた時、私は戦慄した。中食が済むと、彼女が前以て頼んでおいたペンとインキが渡された。と、彼女は私に彼女の云ふ事を書き取つて貰ひたいが、その前に自分で一通の手紙を書きたいと云つた。』

それは彼女の夫へ遣る手紙であつた。彼女はそれを書いたら気が休まると思つたらしい。彼女は夫に對しては非常に愛情を感じてゐたが、博士は前後の様子を知つてゐるので、それをひどく驚いた。そして彼女を試したいと思つて、彼女の夫は裁判の間ちう彼女を見棄てゝゐただから、愛情が傷けられはしなかつたかと云つた。侯爵夫人は博士の言を遮つてから云つた。

『教父様、人間は物事を性急に外見だけで判断してはなりません。夫は始終私の事を氣にかけてゐてくれたのですけれど、何もかも思ふに任せなかつたのです。私たちは私が外國へ行つてからも手紙の遣り取りをしてゐました。若し夫が安全に來られる身の上でしたら、私が牢屋へ入れられた事を知るや否や直ぐ巴里へ來てくれたでせう。けれども、夫は非常な負債をもつてゐるので、巴里へ出れば直ぐ捕縛されるのです。夫が私に對して無情だと思つて下さいますな。』

かう云つて彼女は手紙を書き出した。書き終るとそれを博士に渡して云つた。『あなたは今から私が死ぬ時までの私のあらゆる

る感情の支配者です。この手紙を讀んで下さい。そして若し書
き變へなければならぬ所があるとお思ひでしたら、おつしやつ
て下さい。』

手紙はかう認められてゐた——

今や私は自分の魂を神様に委ねやうとしてゐますので、あ
なたに對する私の愛情をあなたの心の中に堅く留めたいと
思ひます。私は生命の最後の瞬間までも愛情を忘れない
でせう。私が自分の義務を裏切つてしたすべての事をお容
し下さい。私は今恥かしい死にかたをしやうとして居りま
す。それは私の敵の仕事ですが、私は心の底からその人た

ちを容してゐます。あなたもその人たちを容してやつて下
さい。それから又、これからあなたは私のために不名譽な
目にお遭ひになるかも知れないのですがどうかそれを容し
て下さい。私どもはほんの僅かの間この世に生を受けたの
で、あなたもやがては私と同じやうにあなたとなすつたす
べての行爲に對して神様のお裁きをお受けにならねばなら
ない事を考へて下さい。あなたのいろんなお仕事に氣を附
けて下さい。子供たちに氣を附けて下さい。そして彼等に
善い模範を示してやつて下さい。マリラツクの奥さんやク
ーステの奥さんに相談して下さい。どうか私のために出來

るだけ多くの祈禱をさへ下さい。私は死の瞬間までも
自分があなたのものである事を信じます。

ドオブレー

博士はこの手紙を注意深く讀んだが、やがて一つの文句——
彼女の敵といふ文句——が正しくないと云つた。『あなたには御
自分の罪より他に敵はないのですからね。』と博士は云つた。『あ
なたが敵と呼ぶ人たちは、あなたのお父さんやお兄さんたちの
記憶を愛してゐる人たちです、あなたはその人たちよりも餘計
にお父さんやお兄さんたちを愛すべき筈だつたのです。』
『でも、私を殺さうとした人たちは私の敵ではありませんか、

さうぢやないでせうか。そしてその人たちを容すのは基督教信
者の行爲ではありませんか。』

『奥さん、』と博士は云つた。『その人たちはあなたの敵ではあり
ません。あなたこそ人類の敵です。何人と雖も恐怖を感せず
あなたの犯罪を考へる事は出来ません。』

『でも、教父様、』と彼女は云つた。『私はその人たちに恨みをも
つては居りません。私は私を捕へてこゝへ連れて来るのに重立
つた役割を勤めた人たちと天國で遭ひたいと思つて居ります。』
『奥さん、』と博士は云つた。『それはどういふ意味ですか？ さう
いふ言葉は、人の死を願つてゐる人がよく用ひますよ。どうか、

あなたの意味はどういふのか説明して下さい。」

『いけません！』と侯爵夫人は叫んだ。『さうお取りになつてはいけませんわ！ さうぢやないんです、神様がその人たちをこの世で榮えさせて、それから次ぎの世でその人たちに無限の光榮をお與へなさるやう私は望みます。どうか新たな手紙を書かせて下さい。私はあなたの御満足になるやうな事を書かうとしてゐます。』

新たな手紙を書き終ると、侯爵夫人は彼女の懺悔をする事になつた。で、彼女は博士にペンを又つてくれと頼んだ。『私は澤山の悪事を働きました』と彼女は云つた。『口で懺悔をするのだ

と、残らず懺悔をしたかどうかはつきりしない位です。』

そこで二人は聖靈の恵みを哀願するために跪いた二人は『ヴェニ・クリアトル』や『サルヴ・レジナ』(譯者註、何れも羅馬教の和讃をいふ)を唱へた。次ぎに博士が立上つて、卓子に向ふと、侯爵夫人は跪いたまゝで懺悔を始め、その罪を残らず懺悔した。

夜の九時に、その朝ビロー博士を連れて來たシャヴィンニー教父が再び入つて來た。侯爵夫人はやゝ當惑した體であつたが顔には上機嫌の表情を装つてゐた。『教父様』と彼女は云つた。こんな遅くあなたがゐらつしやらうとは思ひませんでした。

どうか今二三分間私を博士と一緒に置いて下さい。』教父は退出した。『あの方は何故おられたんでせう?』と夫人は訊いた。『あなたはお獨りでおゐらつしやらない方がいゝでせう。』と博士が云つた。

『ぢや、あなたは私を置いてお歸りになるつもりですか?』と夫人は恐怖に耐へないかのやうに叫んだ。

『奥さん、私はあなたのお好きなやうにします。』と彼は答へた。『二三時間私に時間を與へて下されば有難いのです。私は一寸家へ歸つて來ますから、その間シヤヴァインニー教父があなたの傍にゐるやうに取計らひませう。』

『あゝ!』と彼女は手を握り締めながら叫んだ。『あなたは私が死ぬまで私の傍を離れないとお約束なすつたのです。それに今あなたは行つておしまひになるのです。どうか覚えてゐて下さい。』

『奥さん、』と善良なる博士は云つた。『あなたを御満足させるために私は出来るだけの事をいたします。私が暫らくの休憩を願ひするのは、明日今日よりもより以上の勇氣をもつて私の任務を果たし、私をもつとあなたのお役に立てるためです。休憩

いお友達より以上の方になつてしまひました。』

をしないと、私の云つたりしたりする事がその影響を受けま
す。あなたは處刑は明日だとお考へですが、あなたが正しいか
どうかは私には分りません。若し正しいとしたら、明日はあな
たにとつては大變な日です。二人の持つてゐる力の全部が要る
のです。吾々はもうあなたの救ひのために十三四時間働きました
た。私は身體が丈夫ではありません。奥さん、若しあなたが私
に少し休息を興へて下さらなかつたら、私は最後まであなたと
一緒にゐる事が出来ないといふ事を考へて下さい。』
『御尤もでございます。』と侯爵夫人は云つた。『明日は私にとつ
ては今日よりもつと大切な日です。私が悪るうございまし

た。あなたは今晚はお休みにならなければいけません。たゞ一
つの事だけしてしまひませう。今お書きになつたのを讀み返へ
して下さい。』

それが済むと、博士は退出しやうとしたが、その時晚餐が運
ばれた。夫人は夕食を済まさずに博士を歸したくなかつた。彼
女は馬車の用意をしてくれるやうに看守に頼んだ。彼女は一杯
のスープを飲み、鶏卵を二つ喰べた。と、直ぐに看守が歸つて
来て馬車の用意が出来た旨を答へた。そこで侯爵夫人は博士に
別れの挨拶をし、自分のために祈つてくれるやう、翌朝六時ま
でにコンシエル・ゼリー監獄へ来てくれるやう約束をして貰ひ

たいと云つた。博士は彼女にそれを約束した。

一六二

一八、靈魂と地獄

翌日、ピロー博士が監獄へ行くと、シヤヴインニー神父が自分の代りに侯爵夫人の傍にゐて、彼女と一緒に跪いて祈つてゐるのを見た。神父は泣いてゐたが、彼女は落着いて、彼女が博士を歸へした時と同じ態度で彼を迎へた。シヤヴインニー神父は博士を見ると退出した。夫人はシヤヴインニーに自分のために祈つてくれるやうに頼んだ。彼女は次ぎに博士に向つて云つた。あなたは約束の時間を守つて下さいました。私はあなたか

約束をお違へになつたと云つて不平を云ふ事は出来ません。ですが、あゝ、何て時間の経つのが遅かつたでせう。六時が打つまでにどんなに長く思はれたでせう！

『奥さん、やつて来ましたよ。』と博士が云つた。『が何よりも先づ、昨晚は如何でした？』

『手紙を三本書きました。』と侯爵夫人が云つた。『みんな短かい手紙ですが、ずるぶん時間がかかりました。一本は姉へ、一本はマリラツクの奥さんへ、一本はクウステさんへ書きました。私はそれをあなたに御覧に入れたと思つたのですが、シヤヴインニーさんが見てやらうとおつしやいました。シヤヴインニ

一六三

「さんはよく書いてゐると賞めて下さいましたから、私は疑ふのをやめました。手紙を書き終ると、私たちはお話をしたり、お祈をしたりしました。ですが、教父様が日課經をお持ちになり、私が珠數を持ちますと、非常に疲勞を感じましたので、床へ入つてはいけないうせうかと伺ひました。教父様は入つてもいゝとおつしやいました。で、私は二時間の間夢を見ずにぐつすり眠りました。私が眼を覺ましますと、私たちは一緒に祈りました。あなたがゐらつした時には恰度その祈を終はつた所でした。」

「では、奥さん」と博士は云つた。「もしお宜しかつたら、もう

一度祈りませう、跪いて、「ヴェニ・サンクテ・スピリソク」(譯者註、羅馬教の和讚の名)を唱へませう。」

侯爵夫人はその通りした。熱情と敬虔の念をもつて祈禱をさへげた。祈禱が終つて、ピロー博士が懺悔を續けるためにペンを取上げやうとすると、彼女が云つた。「私を苦めてゐる疑問が一つありますから、どうか聞いて下さいまし。昨日あなたは神様のお恵みに就いて私に非常な希望を與へて下さいましたが、私は淨罪所で長い間苦まなければ救はれるやうには思はれませんでした。私の罪はあまりに極悪非道で、それでなければ容されないうやうに思ひます。私の汚れが火で焼き盡されるまでは、私の罪

に相當する罰を受けるのでなければ、救はれるとは思へません。ですが、人の話によると、一時的に魂が焼かれる淨罪所の炎は罪人が永劫に焼かれる地獄の火と同じものだといふ事です。さうすると、どうか教へて下さい。淨罪所でこの肉體から離れやうとする魂は、自分が實際地獄にゐないのだといふ事を確かに感ずるでせうか？ 自分を焼いてゐる火がいつかは止むのだといふ事が分るでせうか？ 私が苦む苦行も、地獄へ落ちる人の苦行も同じではないでせうか、私が焼かれる火も、地獄の炎と同じではないでせうか。私はこの疑ひを晴らして頂きたいと存じます。』

『奥さん、』と博士が答へた。『御尤ものお疑ひです。しかし、神様はその正しい所罰に不安の恐怖をお附加へになるにはあまりに正しくゐらせられるのです。魂が肉體を離れる瞬間には、神様の裁きがその人の上に下つてゐるのです。その人は容しの宣告か、滅亡の宣告かを聞くでせう、恵みの状態にゐるか、朽ち果つべき罪の状態にゐるかを知るでせう。永久に地獄に投げ込まれるか、それとも神が一時淨罪所へその人を送つたかを見るでせう。奥さん、あなたは死刑執行人の斧があなたを撃つ瞬間にその宣告を聞くでせう。慈悲の火がこの世であなたを潔め盡してゐるのでなければ、あなたは淨罪所を経ずして眞直ぐに神

の御座を圍繞してゐる祝福された人々の家へ行き、そこでこの世の殉教の報を受けける事は出来ません。』

『私はあなたのおつしやつた事を信じます、もうすつかり分りました。私は満足してゐます。』と侯爵夫人が答へた。

そこで博士と夫人は、前夜中止した懺悔を續けた。侯爵夫人は一晚の間に附加へたいと思ふ幾つかの箇條を思ひ出した。で彼等は續けた。博士は重い罪を書取る時には時々彼女を悔悟させるために懺悔を中止させた。

一時間半ばかり経つと、看守どもが彼女を呼びに来た。書記が彼女に宣告を読み聞かせるために待つてゐるといふのであ

る。彼女は非常に沈着いて、跪いたまゝ、少し頭を動かしながら看守の言葉に耳を傾けたが、やがて聲音も變へずに云つた。

『一寸待つて下さい。もう一言博士にお話したいのです。それから参ります。かう云つて彼女は懺悔の残りを書かせた。懺悔が終ると、彼女は自分と一緒に短い祈禱をさゝげてくれるやうに頼んだ。それは彼女が悔悟の状を現はして判官等の前に出で今迄の無禮な厚顔しさを償ふために神に助けを乞はうとしたのである。』

やがて彼女は外套を着、シャヴィンニー神父が残して置いた祈禱書を持ち、看守の後に隨いて行つた。看守は彼女を拷問所

へ連れて行つた。そこで宣告文が讀まれるのである。

一九、水攻めの拷問

ブランヱイリエル侯爵夫人は、拷問所で五時間の問訊問を受けた。夫人は萬事を自白したが、共謀者のあつた事を否定し、使用した毒藥の成分も知らないし、解毒劑も知らないと云つた。裁判官等はそれ以上問ふても無益だと考へて、書記に宣告文を朗讀するやう相圖をした。夫人はそれを聴くために立上つた。宣告は次ぎの如きものであつた――

裁判所は被告ドオブレー・ド・ブランヱイリエルが父なるメ

ートル・ドリユー・ドオブレー氏及び兩兄を毒殺し、姉テレーズ・ドオブレーをも毒殺せんとして果さとりし罪により、被告に有罪の判決を下す。被告ドオブレー・ド・ブランヱイリエルは跣足のまゝ、頭に繩を着け、兩手に重さ二磅の燃ゆる炬火を持ち、被告人護送馬車に乗りて巴里教會の大門前に運ばるべきものとす。被告は其處にて跪き、兇惡にも復讐の目的を以て父を毒殺し、兩兄を毒殺し、且つ姉の生命をも奪はむとせし罪状を告白して悔悟の意を表し、神と國王陛下と、裁判官等に宥しを乞ふべきものとす。それより被告は同じ被告人護送馬車に乗りてブラス・ド・グレー

ヲに運ばれ、特に設備されたる處刑臺に於て斬首の刑に處
 せらるべきものとす。刑の執行後、死骸は火葬に附しその
 灰は放棄すべきものとす。裁判所は先づ、被告をして共謀
 者の名を自白せしむる目的を以て、被告を通常拷問及び特
 別拷問に處す。被告は犯行の當日より、右の父、兩兄、及
 び姉より譲られし遺産の相續權を失ひしものと見做さる、
 被告の全財産は適當の人に沒收さるべきものとす。被告は
 財産中より四千ルーブルを國王陛下に支拂ふべし。毒殺者
 等の瞑福を祈るために教會に四百ルーブルを支拂ふべし。
 裁判費用は全部被告の負擔にして、その内にはラシヨービ

に關する費用をも算入すべきものとす。

千六百七十六年七月十六日

宗教裁判所

侯爵夫人は恐怖や弱さを少しも見せず、この宣告を聽いてゐ
 た。朗讀が終ると、彼女は書記に「御面倒ですが、もう一度讀
 んで頂けないでせうか。私はまさか被刑人護送馬車に乗らうと
 は思ひませんでした。あんまり驚いたものですから、それから
 後は途切れ／＼に聞きました。」と云つた。

書記は今一度讀んだ。その瞬間から、夫人は刑の執行人のも
 のになつた。執行人は彼女に近づいた。夫人は彼が手に持つて

ある繩でそれと認めただので、一言も口を利かず、彼は頭の先から足の先まで冷やかに眺ながら、自分の手を差延べた。そこで裁判官等は一列になつて進み出で、種々の拷問刑具の蔽ひを除いた。侯爵夫人は刑架や物凄いの鐵輪を凝つと見詰めた。今までにどれだけの人がその上に横はつて泣いたり叫んだりした事であらう！ 彼女は自分のために準備された三つのバケツを見て書記の方を振り返へり——彼女は執行人には口を利きたくなかつたのだ——微笑みながらかう云つた。「きつとこれは私を溺らせるための水でせう？ 私のような身體をした者がこの水をみんな呑み乾してしまふだらうなんて思つちやいけませんよ。」

水攻めの拷問は、當時行はれた拷問の一種であつた。水を罪人の口に注ぎ入れて苦痛を與へるのである。水約八合を充したバケツを八個置き、その内四個の水を注ぎ入れるのが通常拷問で、八個全部を注ぎ入れるのが特別拷問である。執行人は罪人の口へ角状の管を差込むので、罪人が齒を喰ひしばる場合には鼻を摘んで無理に口を開かすのだ。

執行人は一言も口を利かずに、外套や着物を全部脱がせて、夫人をまる裸にした。次ぎに執行人は彼女を壁の所へ連れて行き、地面から二尺の高さある通常拷問の刑架の上へ坐らせた。そこで彼女は又もや共謀者の名と、毒藥の成分と、解毒劑とに

就て訊問されたが、彼女は博士に答へたのと同じ答へをした。そしてかう云ひ添へた。『あなたがたが私をお信じにならないのなら、私の身體はあなたがたの手の中にあるんですから、私を苦めて御覽なさい。』

書記は執行人にその任務を行ふやう相圖をした。執行人は先づ夫人の足を板にしつかりくツついてゐる鐵輪にはめ込み、次に彼女を仰臥させた。その手頸を壁にある他の二つの鐵輪（輪と輪の距離は約三尺）に結び附けた。頭と足は同じ高さであつた。身體は架臺で差上げられてゐるので彎曲して、恰も車輪の上に臥てゐるやうな状態になつてゐる。四肢を更に延ばさせる

ために、執行人は曲柄を二つ廻はした。夫人は足を延ばした。拷問の光景は、次ぎの記録に明かである。

彼女は小刑架の上に手足を延ばして仰臥しつゝありしが、五六度『あゝ！ 死にさうだ！ 私は本當の事を云つたのし。』と云へり。

水を注ぎ込まれる、彼女は身體をねぢ曲げて、『死にさうだ！』と云へり。

水は更に注ぎ込まれる。

共謀者の名を云へとの勸告を受けて、彼女は妻を亡き者にせんがために毒藥を乞ひし者たゞ一人あれど、その人は死

亡せりと答へたり。

若し共謀者を有せざるならば、彼女は何が故にコンシエルゼリー監獄よりペナウチエルに書面を送り、彼が彼女のために能ふ限りの盡力をなし、この事件に就ては彼は彼女と利害を同うする事を記憶するやう乞ひしかとの問ひに答へてペナウチエルがサント・クロアと毒薬に關して或る了解を持ちしか否かは全然彼女の知らざる所なり。然しサント・クロア所持の函中にペナウチエルに關する書類發見せられし時、彼女はサント・クロアの家にて度々ペナウチエルに出遭ひし事を思ひ出し、或は二人の友情には毒薬に關する

秘密が隠され居りしには非ずやと考へ、恰もその秘密を知れるが如く装ひて、ペナウチエルに手紙を遣はせし次第にて、萬一彼がサント・クロアの共謀者なりせば、彼は夫人が必定彼を告發するならんと想像して、彼女を救ふために最善を盡すべし。若し彼が共謀者ならざる場合には、手紙は無駄骨折となるに過ぎずと考へたるなり、と彼女は云へり。

更に水は注ぎ込まれしが、彼女は甚だしく身體をねぢ曲げて、この問題に就ては能ふ限りを自白せり。若しこれ以上云ふとすればそれは虚偽なりと、彼女は云へり。

110、拷問の無効

これで通常拷問は終つた。侯爵夫人は自分を溺らすだらうと考へた水の量の半分を飲んだのであつた。執行人は更に特別拷問を續ける前に一休みした。今迄彼女が横はつてゐたのは高さ二尺の刑架であつたが、今度は三尺五寸の高さある刑架を彼女の身體の下へ挿込んだので、身體は更に曲つた、繩を弛めずにさうされたので、四肢は更に緊張し、手頸や足頸を引締めてゐる鐵輪は肉を裂き、血が流れ出た。拷問が再び始まつたが、それは裁判官の訊問と受刑者の答辯のために時々中止された。彼

女はもう叫聲も出ないほどになつた。記録にはかう記されてゐる。

大刑架の上に横はりし彼女は、五六度かく叫べり。『おゝ、神様、身體が切れ〜に裂けます！ 神様、宥して下さい！ 神様、お恵みを！』

共謀者に關して、まだ云ふべき事はなきかと訊かれて、彼女は、自分はこの儘死するかも知れざれど、嘘言を吐いて自分の魂を亡ぼさざるべしと云へり。

水注ぎ込まる、彼女はやゝ身動きせるも、口を開かず。

毒藥の成分及びその解毒劑は何かといふ問に對して、彼女

はその成分を知らず、只一つ思ひ出すは蛙なりと答ふ。サ
 ント・クロアは彼女に秘密を打明けざりき。彼女はサント・
 クロア自身それを作りしには非ずして、グラールゼルが調合
 せしものと信ず。或る毒薬の中には稀薄にせし砒素の他何
 ももの認めざりき。解毒劑に關しては、彼女の知るはたゞ
 牛乳のみなり。午前中に牛乳を飲みし人にして、毒薬の最
 初の襲撃の時、更に今一杯の牛乳を飲むならば、少しも恐
 るゝに足らずとサント・クロアが彼女に語りし事あり、と
 彼女は云へり。
 何かその外に云ふ事はなきかと訊かれて、彼女は最早萬事

を自白したれば、たとへ殺さるゝとも何も云はざるべし！
 答ふ。

水注ぎ込まる、彼女は少し腕き、死なんとすと云ひしのみ
 にてそれ以上口を開かず。
 水注ぎ込まる、彼女は更に激しく腕きしも、何事も云はず。
 更に水注ぎ込まる、彼女は身體をねぢ曲げ身悶えし、深き
 呻聲を出して、『おゝ、神様、私は殺されます！』と叫びし
 が、その他には何事も云はず。

拷問はそれで終つた。彼女は刑架より下ろされ、繩を解かれ
 て、常例により焚火の前へ置かれた。彼女は焚火の傍の疊の上

に横はりながら、慈悲深き博士の訪問を受けた。博士は前述の如き光景を見るに耐へなかつたので、彼女に退出の許しを乞ひ神が彼女に忍耐と勇氣を與ふるやう、別室で祈つてゐたのである。博士の祈禱は空しくなかつた。

『あゝ、』と侯爵夫人は博士を見ると云つた。『永い間 私はあなたにお目にかゝつて、あなたに慰めて頂きたいと思つてゐました。拷問は随分長い間で、苦しいございました。ですが、私が人間と交渉するのはこれが最後でございます。これからは何をすることも神様と御一緒です。手や足がこんなに裂けたり傷ついたりしたのを見て下さい。私の拷問執行人は、基督様がお責め

られになつたのと同じ場所で、私を責めたのぢやないでせうか？』

『それだから、奥さん。』と高僧が答へた。『あなたの苦痛は、今やあなたの幸福です。苦痛の一つ／＼が天に近づく階段です。あなたの云はれる通り、今やあなたは神様だけのために存在して居られるのです。あなたの考も希望もみんな神様へ結び附けねばなりません。吾々は神様があなたを選んで下さるやうに祈りませう。汚れた者は神の御座には近づけないのですから、天國へ行く道の邪魔をするすべての物からあなたを潔めるために骨を折りませう。』